
真・恋姫無双 ～星空の誓い～

偏頭痛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 ～星空の誓い～

【Nコード】

N7360N

【作者名】

偏頭痛

【あらすじ】

それは平和を願い戦う少女たちの物語

時代の転換期に訪れる戦乱の世を嘆く二人の少女は人々の笑顔を求め、仲間たちとともに激動の時代を駆け抜ける

平和のために戦うという矛盾を抱えながら・・・

初投稿作品です。温かい目で見ていただけたらと思います。

あと、主人公は女の子です。それでもって強いです。たぶん最強になるはずです。それでもいいという方はどうぞ

P r o l o g u e (前書き)

初投稿です

至らないところだらけですが「こつしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきま
すので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます!!

Prologue

とある村

村の外れの一面に広がる草原の中
星空の下に二人の少女がいた

「・・・本当に行っちゃうの？」

桃色の髪を肩の位置まで伸ばした少女は、瞳に涙を溜めながら問いかける

「うん、師匠と一緒に大陸をめぐる旅に出るよ」

もう一人の薄い紫色の長い髪を後ろで一本に纏めた少女は、外套を身にまといながら答える

「・・・また会えるよね？」

「当然でしょ」

「それじゃあ・・・約束だよ？」

小指を出しながら少女は言った

「うん・・・あ、見て！流星だよ！！」

「本当だ・・・きれいだね」

「・・・うん」

二人の少女は夜空を見上げながら静かに涙を流した

（1時間後）

「あ、終わっちゃった・・・」

「すごかったね」

流星が止まると、妙齡の女性が歩いてきた

銀色の髪を二つの団子のようにしてまとめていて、背はあまり高くなく、

星歌と同じような外套を纏っている

「月歌、そろそろ行きますよ」

「あ、はい師匠」

星歌は涙をぬぐいながら歩き出した

「・・・」

桃香は何も言えずにうつむいてしまった

月歌は彼女の様子に微笑みながら声をかける

「またね、桃香」

「うん・・・絶対にまた会おうね、月歌ちゃん」

顔を上げた桃香の顔には涙はなく、綺麗な笑顔だった

第一話 出会いがもたらす始まり（前書き）

小説って難しいですね

ですが、必ず完結させます！！

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などを指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第一話 出会いがもたらす始まり

大陸某所

一面に広がる平原に女が一人、少女が一人歩いていた

「大陸も久しぶりだよね」

女は腰のあたりまで伸ばした薄い紫色の髪を一本にまとめ、茶色の外套を纏っている

「そうですね・・・だいたい8年ぶりくらいじゃないでしょうか」

少女は女よりも濃い紫色の髪を肩のあたりで揃え、同じく茶色の外套を纏っている

あたりはすでに暗くなっており、星が輝いている

「様々な星空を見てきたけど・・・やっぱり生まれた国だからかな、一番いいや」

「・・・そうですね」

「うん、空気までもが私の帰国を歓迎してくれているようだね！」

「・・・そうですね」

「いやー、海上もなかなか楽しかったけど、陸上は落ち着くね！」

「・・・いいかげん現実逃避はやめてください」

少女は呆れたように言った

「あつちに森が見えますからそこまで行きましょう」

「・・・はい」

「いじけないでください」

溜息をつきながらも少女は女を引っ張っていく

「だいたいですね、「こっちのほうに行けばなにかありそう」とか、

「あつちに行けばいいと思う」とか、勘で動くのを止めてくださいよ」

「・・・」

「聞いてま「静かに」っ！どうかしましたか？」

女の雰囲気が変わったのを少女は察知し、尋ねた
ぴりぴりした緊張感にじれっなくなり、ゴクリとのを鳴らす

「ほらっ！！ちようちよだよ！！」

「・・・」

プチッ！と何かが切れた音がした

「いいかげ「いいかげんに出てきたらどうなんですか？そこの岩陰に隠れている人」っ！」

女の視線は近くにあつた岩の方を、先ほどまでと違い、鋭い目で見つめている

「・・・よく気付いたわね」

「まったくじゃ、黄巾の奴らには見えんし、腕も立つようじゃの」
現れたのは褐色の肌の女が二人

一人は薄い桃色の髪を腰下まで伸ばした活発そうな女性
もう一人はほとんど白に近い薄い紫色の髪を腰まで伸ばした妙齡の女性

二人の女の腰に剣があることに気づき、少女も己の武器を抜こうと
外套の中に手を入れるが、止められた

「何か御用ですか？」

少女を止めた女が尋ねると

「そうね、こんな時間にこんな場所で怪しい二人組を見かけたものだから・・・」

「何をするのか見張っていた、ということですか？」

「ええそうよ、それにしてもあの距離でよく気がついたわね」

「うむ、完全に蝶々に集中しておると思ったぞい」

二人の女と少女の視線が一か所に集まる

「ただの勘ですよ？」

あまりに平然と言つてのけるので、場が静寂につつまれた

「・・・あははははは！」

「くつくつく」

二人の女が突然笑い出した

この声を聞いて、少女も我に返り

「また勘ですか？ まったく・・・」

呆れかえってしまった

「あなたたち面白いわね」

「いえいえ」

「・・・何照れてるんですか」

女は少し赤くなって頬をかいていた

「気に入ったわ。私の名は孫策、字は伯符よ」

「儂は黄蓋、字は公覆じゃ」

「私は法正、字は考直です」

「わたしは姜維、字は伯約です」

自己紹介を終えると孫策と黄蓋は馬を連れて法正たちに近付いて行った

「あなたたちつてこれからどうするつもりなの？」

「そこの森で野宿するつもりですよ」

「それなら私たちと一緒に来ない？」

孫策は法正を見つめながらも問いかけた

「・・・そちらの要求は？」

姜維が問いかける

「話が早くて助かるわ。実はこの近くに黄巾党が1万ほど集まっているの」

「ふう・・・一宿二飯の恩を命を懸けて返さなきゃいけないなんて随分高くつくのね？」

「お主なら楽な話ではないかの？」

「・・・まあいいでしょう、お世話になります」

「お世話になります」

法正と姜維が答えた

「そうと決まったら早く戻りましょう！冥琳にまたくどくどくと言われちゃうわ」

そうして、法正は孫策の馬の後ろに、姜維は黄蓋の馬の後ろに乗り走り出した

馬上

「ねえ？」

「何ですか？」

孫策が法正に尋ねた

「あなたと姜維って子の関係って何？」

「・・・恋び「月歌様！何を言っているんですか！？」・・・ふう」

「ふう、じゃないですよ。変な嘘つかないでくださいー！」

「お主もよく聞こえたのう・・・」

並走しているとはいえ、馬上であるため同じ馬に乗っているならま

だしも、違う馬に乗っている二人の会話はそうそう聞き取れるものではない

「あの人のあの顔は悪戯を思いついた子供の顔と同じです。変なことを言おうとしているってすぐにわかります！」

見た目は子供の姜維が言っていると結構説得力があつた

「・・・あなたたちって体と中身逆じゃない？」

孫策も若干呆れているようだ

「冗談はともかく、姜維は私の弟子ですよ」

「へー、弟子を取ってるってことは法正ってかなり強いんだ」

「一目見ただけで強者と分かったからのう、弟子までいるとは思わなかったがな」

「私だってまだまだですよ？世界にはもっとすごい人たちがいるんですから」

「そうですね、月歌様は確かに強いですが世界にはもっとすごい人たちがいますからね」

「そうね、私だってあなたと戦ったとしても負けるつもりはないし」

「そういうことじゃないんですけどね・・・」

「どういうことじゃ？」

「まあ、その話はまたいつかということとで・・・ほら、見えましたよ？」

法正の指さす先に呉の旗が見えた

「・・・って、街や村に連れて行ってもらえるんじゃないかなってんですか！？」

姜維が大声を出して孫策たちに尋ねるが

「あれ、言ってなかったっけ？黄巾党の討伐を手伝って貰うって」
孫策が不思議そうに言った

「そんな話聞いてませんよ！」

姜維にとつては初耳だったようだが

「さっきの話を聞いていたでしょう？」

と、法正に言われた

「聞いていましたが？一宿一飯の恩に戦に参加するって話ですよね？」

「聞いてるじゃない、ここが私たちの陣よ」

「そうじゃなくて「桜」・・・なんですか月歌様？」

「私はちゃんと言いましたよ？「一宿二飯の恩」だと」

法正は子供を諭す親のように優しく言った

「・・・そういうことですか」

姜維も理解したようだ

晩御飯をご馳走になり、眠る場所を提供してもらい、朝ご飯を食べ
て戦に参加し、昼前には孫策たちとは分かれるということなのだろう
「そうですよ？」

法正はその様子に微笑んだ

「・・・」

「・・・」

「お二人ともどうかしましたか？」

黙っている孫策たちに法正が問いかけるが

「いや、何でもないわ」

と、孫策が答えた

この時孫策たちは驚いていた

孫策は戦を手伝って貰うとは言ったが明日が戦だとは言ってなかったのだ

確かに「一宿二飯」は変だとは思ったがそこまで見越していたとは
考えていなかった

そのことにすぐに気付いた姜維にも驚いた
この二人の信頼関係はよほど強いのだろう
これは明日の戦も楽しくなりそうだと思い、
笑うのであった

激動の時代はもう始まっていた・・・

第一話 出会いがもたらす始まり（後書き）

早速感想を頂きました！！

るかけん様ありがとうございます！！

感想があつたことにテンションが上がり、やる気も貰いました
という事で、第二話の方も本日には載せますのでよろしくお願
いします

少し短い気がしますけどどれくらいの量がいいのかわからないので、
もっと長いほうがいいという方はお知らせください
可能な限り長くしていきます

第二話 蒼天已に死す 黄天當に立つべし（前書き）

9 / 1 4 （火） 1 : 4 5 一部修正しました

遅くなりました

ちよつと用事が終わらずに遅れてしまいました

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます!!

第二話 蒼天已に死す 黄天當に立つべし

陣内部

「雪蓮！！こんな時間にどこに行っていた！？」

「うーん・・・お散歩？」

「・・・一応そこは周辺の警戒と言っておくべきじゃろ」

陣の内部に入った法正たちの前にやってきた褐色の肌に腰まで届く黒い髪の、眼鏡をかけた女性が孫策を問い詰めるが、孫策は軽く返した

「・・・明日は戦なのよ？兵たちもピリピリしているのに一番上に立つ人間がふらふらしていたら不安になってしまっただろう、まったく」

頭を押さえてぶつぶつ言っている

「・・・あの人も苦勞しているんですね」

「そうみたいだね」

姜維の発言に相槌をうちながらも法正は空を見上げていたそれに気付いた姜維は邪魔をしないように少し離れて孫策たちの会話を反芻していた

「あれ？兵の一番上に立つ人間って・・・っ！まさか！？」

「気付くのが遅いですね、桜？」

「・・・月歌様はいつ？」

「腰に差している剣を見た時、ですよ」

法正は空を見上げるのを止め、姜維に言った

「あの剣は南海霸王。孫家の家宝ですからね。知らないのは仕方な

いですけどね」

法正は目を細めて孫策を見やる

彼女は先ほどの女性からお説教を受けているようだ

「・・・とりあえず挨拶に行きましょうか？」

「・・・そうだね、長くなりそうだし」

そう判断した二人は孫策たちの方へ向かった

「だいたいあなたはいつもいつも「すみませんが少しよろしいでしょうか？」誰だ？」

「私は法正、字は考直です。こちらは弟子の姜維」

「はじめまして、姜伯約です」

「それで？お前たちは何故ここにいるのだ？」

「先ほど伯符殿と出会い、戦陣に加わらないか？との誘いを受けました次第です」

そう言つて法正は孫策の方を見やった

「・・・法正が礼儀正しい」

「これは・・・驚いたの」

孫策たちは驚いていた

特に孫策は法正を自分と同じ部類の人間だと思つていたため、この対応は意外だった

「・・・いつもこうであつて欲しいな」

姜維は遠い目をしていた

いつも振り回されているのだろうその姿は外見に似合わず哀愁を帯びていた

「？よくわからんが・・・お前たちは黄巾党ではないのだな？」

「ええ、違います。私たちは各地を旅して回っていました。実を言

うとこの国にはつい最近帰ってきたばかりなのでこの地の状況を教えていただきたいのですが？」

「帰ってきたということは・・・五胡へ行っていたのか？」

五胡とはこの国の西方に位置する国のことで、たびたび漢王朝に侵攻してきている国のことである

「確かに五胡にも行きましたが、私たちは世界を一周してきたので、東方の海を渡ってきたようなものです。ちなみにですが、私たちの故郷はこの国ですよ」

「世界を一周だと！？この国の東方の海の果てではないのか？」

この時代の船は脆く、いまだに東方の海の果てを見たものはいないが、この世界では海の果てがあり、その先は奈落の底へと続いていると思われていた

「いえ、そのようなことはありませんでしたよ。私たちはこの国から西方へまっすぐ進み、世界を巡ってこの国に帰ってきたのです」
この発言にその場にいたものは姜維を除いてみな驚いていた
孫策は目を輝かせながら、黄蓋は目を丸くして、そして法正と話していた女性は開いた口がふさがらないようだった

「これは私の私見ですが、この世界は円の形をしているのではないのでしょうか？」

「円・・・だと？」

「はい、そうすれば私たちがこの国へ帰ってきたことにも説明ができます」

「・・・確かにそうだが」

さすがにすぐには信じられないのだろう

場の空気が静寂に包まれた

その空気を壊したのもまた法正だった

「話が十分それましたね・・・それで、この国の情勢を教えてくださいますか？」

「あ、ああ・・・わかった。この国の情勢だったな」

「あ、その前にあなたのお名前を教えてくださいだいても？」

まだ名前を聞いていなかったと、法正が尋ねる

「そうだったな、私は周瑜だ。この軍の軍師のようなものだ」

周瑜が名乗った後、この国の情勢を語った

まとめると以下のようなものであろう

- ・外戚・宦官が20歳未満の幼い皇帝をたて、権力を専横している
- ・諸侯は民に重税をかけ、自分たちは豪勢な暮らしをしている
- ・重税に耐えかねた農民たちが立ち上がった
- ・農民たちは黄色い頭巾を頭に巻いているため、黄巾党と呼ばれている
- ・黄巾党は各地の街や村を襲い、略奪をおこなっている
- ・朝廷は諸侯に黄巾党の討伐を命じた

「蒼天已に死す、か」

「ひどい・・・」

話を一通り聞いた二人はそうこぼした

「・・・それであなたたちは明日の戦に参加するということではないのか？」

「はい、賊の討伐に参加いたします」

こうして法正と姜維の参戦が決まった

「あら、冥琳いいの？この二人のことを疑ってるんじゃないの？」

「・・・雪蓮が連れてきたんだ、何か感じたのだろう？あの二人に」

「あなたが私の勘を素直に信じるなんて・・・明日の戦は槍でも降

つてくるんじゃないかしら？」

「それは怖いのか？」

孫策たちが周瑜を茶化す

「・・・少なくとも法正は嘘を言っているようには見えなかったかな」

「そうじゃの、あ奴の目は真っ直ぐじゃったからな。少なくとも今は味方とみていいじゃろ」

「・・・本人目の前にしてそういうこと堂々と言いますか？」
法正は照れていた

「それで、敵の規模とこちらの規模は？」

「敵兵力は細作の情報通りならおおそ一万といったところだろう。こちらの兵数は半分の五千だ」

「・・・敵の陣地は？」

「この先にある街を占領している。住民は抵抗したため、みな殺されたそうだ」

「・・・そう。何か策はあるのですか？」

「奴らを街から引きずり出すつもりだ。あの街は門が三か所にあるが、黄巾党と街の人々との争いによって東側と西側は開かなくなっているそうだ。そこで、隊を三つに分ける」

「二つではないのですか？」

姜維が疑問を口に出すと

「一つの隊が残っている門の前で敵と交戦し、機を見て後退、追撃に出た敵を残りの隊で左右から挟撃って感じかしら？」

法正が周瑜を見ながら言った

「・・・その通りだ」

周瑜は何かを考えながらも答える

「私たちはどこの担当をすればいいので？」

「お前たちには挟撃する部隊の指揮を頼みたいのだが？」

この発言には法正さえも驚いた

「会ったばかりの私たちに一軍を任せていいのですか？」

「お前ならやつてくれると思ったのだが？一軍の指揮は無理か？」

周瑜は挑発的な笑みを見せる

「出来ませんが・・・まあいいでしょう、引き受けました」

一度空を見上げ、法正は答えた

「では、詳しい編成の話に入る。私と雪蓮は三千の兵を率いるおとり役の本隊だ」

「任せて」

「・・・一人で勝手に突っ込んだりしないように」

「・・・だめ？」

「だめだ」

周瑜は溜息をつきながらも言い放った

「次に左右からの挟撃を行う隊についてだが、それぞれ千人ずつにわけ、左を祭殿に、右を法正に任せたいのだが？」

「心得たぞい」

「了解です」

二人が頷きながら答える様子を見て、周瑜は一度頷くと

「では解散だ。明日の戦に備え早めに寝るように」

その言葉を聞き、法正と姜維はあてがわれた天幕へと戻って行った

「さて、儂らも休むかの」

「祭ちよつと待って。ねえ冥琳？」

「何だ？雪蓮」

「なんだか嫌な予感がするんだけど・・・」

「・・・明日の策についてか？」

「いえ、何か寝るのは危険な気がするのだけど・・・」

「法正たち、かの？」

「いいえ、あの二人じゃないわ」

「なら気のせいじゃないのか。雪蓮の勘も偶には外れるのではないか？」

「だが・・・策殿の勘じゃからのう。用心だけはしておくべきじゃない」

「そうですね」

そうして三人とも自分の寢床へ入るのだった

客将用天幕

「星歌様、寝ないのですか？」

天幕の中で法正は何かを考えているようだ

姜維は横になりながらも法正に尋ねた

「ふう・・・桜、残念ながら今晩は寝れないようよ？」

「どういうことですか？」

姜維は法正の言葉をいぶかしんでいる

「私たちのほかにもお客さんが来るわね」

「！？奇襲ですか？」

「ええ、数は・・・二千つてとこかしら」

法正は淡々と話すが内容はとんでもないものである
全くの無防備に奇襲を受けたら軍が瓦解してしまう

「早く皆に伝えなくては！？」

「落ち着きなさい！！」

慌てて天幕を飛び出そうとする姜維を法正が止めた

「何故ですか！？このままでは「落ち着きなさい」と言っているのです」・・・はい」

姜維は一度深呼吸をし、気持ちを落ち着ける

姜維が落ち着いたのを確認し、法正は満足そうに微笑む

「あなたにとってもこれは初陣になりますから、平静でいなさいというのが無茶なのでしょうが、戦場ではそれを失ったものから死んでゆくのです」

「・・・もう大丈夫です」

法正が姜維に対して敬語を使うときは師匠としての言葉であるということを知っている姜維は改めて考える

「・・・わたしたちだけで迎撃する、ということですか？」

「がんばりましょうね？」

法正は姜維の言葉を聞いて満足そうに言った

「あちらにも優秀な将が居たのでしょうね。私がその将の立場でしたら夜襲をかける部隊は敵軍を混乱させることを主な目的とし、時間差で本隊が進軍、そのまま全軍でもって攻撃をしかけます」

姜維はゾツとした

もとより敵の方がこちらの倍はいるのだ

そのまま突撃されてもきつい戦いになりそうだが混乱している中で本隊合流はまずいだろう

「今から撃退するために、軍規模での準備をしても相手の方が先に仕掛けてくるでしょう」

「・・・準備は間に合いませんか？」

「間に合わないでしょうね。私たちだけで対応する必要があります」

少しの期待を込めて尋ねるもすぐに否定される

「・・・どうやって私たちだけで撃退するのですか？」

「撃退ではなく迎撃です。別に退ける必要はありません」

姜維は首を傾げた

法正は悪戯を思いついた子供のような笑顔を見せる

「敵を罠に嵌めます。桜は周瑜殿にこれから話すことを伝えてきてください。私は先に準備していますので、伝え終わったらこの陣の南端まで来てください」

「御意です」

姜維は法正の話を周瑜に伝えるに駆け出した

法正はその様子を見つめながらも彼女を守ることを心に誓うのであった

第二話 蒼天已に死す 黄天當に立つべし（後書き）

戦まで入れようと思いましたが、長くなるのでいったん切ることになりました

まだ日付変わってませんよねw

次話はいよいよ戦場です。自信ないです

アドバイス等はいつでも受け付けておりますのでぜひお願いします

第三話 初陣、忘れてはいけない恐怖（前書き）

ごめんなさい！

戦まで入りませんでした・・・

序盤で書きたかったことを書いていたら、戦をいれるとあまりに多くなりそうだったので、戦の手前で切りました

次回こそ戦です！！

それと、主人公の真名を変えました

このままだと星（趙雲）とかぶってしまうためです

この変更はいずれ意味を持つてきますので、変えさせて頂きました
以前の話の修正も行いましたが、まだ直ってない箇所がありましたら
ご報告ください

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて
教えてください

感想も待ってます！！

第三話 初陣、忘れてはいけない恐怖

天幕内

「以上が月歌様の考えです」

「・・・夜中にたたき起こされて、まだ会ったばかりの者の話を信じると？」

周瑜は不機嫌そうに言い放った

周瑜だけではない

この場には孫策と黄蓋もいるが、両名とも不機嫌を隠そうとしていない

さすがに寝たばかりの状態で起こされるのはイライラするのだろうか

「・・・確かに信憑性のない話だと思います。ですが、信じて頂けないのならあなた方は全滅するだけです」

場が静寂に包まれた

確かに新参者の話で信じるには難しいものである

だが、事実なら敗戦は確実だろう

姜維の言う通り全滅する可能性もある

「・・・法正は私たちがこの話を信じると思っているのかしら？」

静寂を破ったのは孫策だった

相変わらず不機嫌そうだが、かすかに法正が策を話す時に見せる悪戯っ子のような表情が、一瞬だけだがうかがえた

十年以上法正と共にいた姜維だからこそ、その表情を見逃すことはなかった

「私も月歌様に同じ質問をしました、月歌様は笑顔で「孫策殿がいる軍だ。信じてもらえるさ」と言っていました」

「ぷっ・・・あははははは！なるほど、法正も私と同じ人種ってことね」

孫策がいきなり笑い出した

その顔は本当に楽しそうで、姜維には幼馴染の話をする法正がだぶって見えた

一方で周瑜と黄蓋は理解できないようで、首を傾げて視線を交わしていた

「どういう意味なの、雪蓮？」

「そうじゃぞ、二人だけで分かりあつとらんで説明してくれ」

孫策は不機嫌ではなくなったが、周瑜と黄蓋の不機嫌は度をましたようだ

「簡単な話よ。法正も私と同じで勘が働くってことよ」

「・・・いつもその勘に振り回されるんですけどね」

孫策は笑いながら、姜維は疲れた顔をして言った

その様子が人事には見えない周瑜だった

「・・・で、策殿は法正の話を信じるのかの？」

「ええ、信じるわ。」

「・・・それも勘か？」

「もちろん」

孫策は非常にいい笑顔で答える

黄蓋も愉快そうに笑っていた

そんな二人に周瑜は頭を押さえて溜息をついた

その様子がやはり人事に見えない姜維であった

「・・・それで、たった二人で本当に奇襲を撃退できるのか？」

「月歌様はできると言っていました。それと、“撃退”ではなく“迎撃”だと」

「……………なるほど、了解した。では、法正の策を借りるとしよう」

今度は周瑜のみが理解したようで、口元に笑みが浮かんだ姜維さえも策の全容は聞いていないのだが、周瑜は全てを察したようだ

そんな様子に孫策は不満そうである

「一人で勝手に分かってないで説明してよね！」

「後で説明するさ。それよりも雪蓮は法正が率いる予定だった部隊を頼む。祭殿は姜維の話した通りの位置についてください。本隊の指揮は私がとる。兵たちを起こしに行こう」

時間がないとばかりに指示をだし、天幕から出ようとする

「……………ちゃんと後で話しなさいよ？」

「僕も聞きたいのう？」

ぶつぶつ言いながらもあとに続く孫策たち

姜維は孫策たちの（実際は周瑜の）説得という大役をおえ、ホッと一息つき、自分の師が待っていることを思い出したため、慌てて天幕を出た

すでに日付も変わり、草木も眠る丑三つ時であった

法正が姜維に敵の襲来を告げてから一時間が経過していた

孫呉軍陣内南部

「ふう……大分気配が濃くなってきたわね」

呉の陣地の近くにあった木の上で法正はつぶやく

時間との勝負になるのだが、それほど焦っているようにも見えない
落ち着いて自分の策に必要な準備をしていく

「近くに木がたくさんあつてよかった」

彼女の策には必要不可欠なものであった

おかげで敵軍の足止めが可能になった

そう、彼女は敵軍をこの場で足止めすることが目的であった

敵を退けるのではなく、敵を足止めするのだ

撃退できないこともないのだが、それでは自分の策が失敗してしまう
だからこそ、この場で足止めする必要があるのだ

「月歌様！」

「・・・説得は成功したみたいね」

実は一番心配していたのは周瑜の説得であった

（黄蓋はこちらの話は半信半疑でも、孫策の勘は信じるでしょう
孫策は自分と同じ人種だ、私が同じ立場なら絶対に信じるからね
問題は周瑜だったけど・・・孫策を信じているって解釈でいいのか
な）

などと考えていた

「はい！そちらは信じて任せると言っていました」

「御苦労さま。では早速準備を手伝って貰いましょうか」

そう言つて姜維に渡されたものは木の枝だった

「・・・これは？」

姜維は首を傾げる

準備と木の枝にどういった関係があるのだろう、といった感じだ

「木の枝ですよ？見てわかりませんか？」

法正が敬語を使つたのを聞き、改めて考えてみる

（月歌様は撃退ではなく迎撃すると言つていた
ならば目的は足止めのはず

たつた二人で足止めするためには・・・）

そこまで考えた姜維はこの木の枝の使い道を悟った

「なるほど・・・では私はあちら側で仕掛けをしてきます」

「よろしく願いますね」

姜維の理解した様子に、法正はやはり微笑むのであった

「さて、私も仕上げてしまえますか！」

優秀な弟子に触発され、法正も仕掛けを施していった

日出までおおよそ3時間、法正の予測した奇襲はあと一時間から二時間ほどの猶予である

孫呉陣内

姜維が法正の話をした一時間後

孫策たちは兵を起こし、配置に就く準備をしていた
そんな中で周瑜がふと言った

「それにしても・・・すごいな、法正は」

それは独り言であつたのだが、近くにいた孫策の耳にも入ったようだ

「確かにすごいわね。私も嫌な予感を感じていたけど、奇襲の気配を察知するなんて」

「それだけじゃない、法正は逆にこれを利用し相手を全滅させる策を提案したのだ」

「確かに、ね。私も理解できたわ、法正の策が」

「ああ、雪蓮と同等の勘の良さを持ち、頭の方は私よりも上かもしれないな」

周瑜の言葉に孫策も頷く

「やっぱり・・・いろんな経験をしてきたってことじゃないかしら

？」

「世界を一周した、か。確かにそんな経験を持つ人間はあいつらだけだろうからな」

「それに・・・かなりの武も持っているみたいだし」

「・・・あの師弟は敵に回したくはないな」

「まったくね」

孫策も周瑜も苦笑いだ

文武両道にして、その直感はときに未来を見ているのではないかと思えるようなものを持っているのだ

敵に回すことになったらそれは強大な壁となって立ちほだかるだろう

「・・・このまま仲間になってくれないだろうか？」

「おそらく無理ね」

孫策は確信を持って答えた

「何故言いきれる？」

「女の勘、よ？」

そう言って笑う孫策に、周瑜はまた溜息をついたのであった

孫呉軍陣内南部

月が地平に沈もうとしている

法正が予測した奇襲の時間まであとわずかである

姜維は体の震えが止まらなかった

仕掛けを施している間はまったく問題なかったのだが、いざその時が迫るにつれて激しい恐怖が湧きあがってきた

初陣にして、自分の参加する軍の倍以上の数を相手にするのだ

その恐怖は当然と言えよう

また、姜維は今まで敵と戦ったことはあっても、敵を殺したことは

ない

これから自分は人を殺すことになるという恐怖もあった
そんな姜維に法正は声をかける

「桜、大丈夫？」

「はい、大丈夫でしゅ」

緊張と震えのあまり舌を嚙んでしまった

姜維は顔を赤くしてうつむいてしまう

「グス・・・ごめんなさい」

「・・・何が？」

「わたしは・・・月歌様の弟子なのに・・・こんなことで怖くて震えてるなんて」

「・・・どうして私の弟子は怖がったり、震えたりしてはいけないの？」

「だって・・・月歌様は強いし、頭もいいし、何でも完璧にできるのに、こんなわたしが弟子だなんて・・・情けなくて・・・」

それは少女の持つ悩みが一番大きなものだった

法正のような優秀な師に自分のような弟子がいていいのだろうかと考えない夜はなかった

その迷いが初陣前の震える心に、その強さを増して、湧き出てきたのである

そんな姜維を法正は何も言わずにその胸に抱き寄せた

「え・・・月歌様？」

「まずは訂正だよ？私の弟子はどこに出しても恥ずかしくなくらい優秀で、頑張れる子なんだから」

「・・・月歌様」

「ふふ、だから今みたいに自分を貶さないで？あなたは私の自慢の弟子で、大切な妹なんだから」

「・・・おねえ・・・ちゃん」

姜維は法正の言葉に涙を流す

その様子に法正は、彼女の頭をなでながら微笑む

「久しぶりに呼んでくれたね」

「・・・おねえちゃん」

二人は血が繋がっているわけではない

だが、涙を流す姜維を抱き締める法正の姿はまさに妹を慰める姉そのものだっただけ

「・・・落ち着いた？」

「うん・・・ありがとう、お姉ちゃん」

しばらくして姜維が泣きやんだことを確認すると、法正は姜維を離し、彼女の師としての言葉を語る

「・・・さて、姉としての訂正の次は師としての言葉です」

「はい、月歌様」

「あなたは初陣で震えたことを情けないと言いましたね？」

「・・・はい」

「ただ、あなたは死の恐怖に震えただけではないのでしょうか？」

「・・・はい、わたしは・・・人を殺すこともこわいです」

そんな姜維に法正は目を細めた

目の前にいる姜維の姿にかつての自分を重ねていた
だからこそ、言うべき言葉は分かっている

「大丈夫ですよ？初陣で震えないのは自分の力を過信する愚か者が、ただの何も考えていない馬鹿くらいですから。むしろ、あなたはちゃんと自分の力のほどを理解しています。」

「・・・はい」

「また、人を殺すということについてですが・・・これは私もこわ

います」

「えっ……」

法正の発言に驚きを隠せない

法正は今まで何度も戦に参加していた

遠い異国の地で英雄と呼ばれるほどの働きもしている

だからこそこの発言には驚いた

「ですが……月歌様は何度も戦争に参加して、人を殺して」

姜維は最後まで言い切れなかった

法正が悲しそうに顔を伏せたのだ

法正のそんな表情は今までにたった一度しか見たことがない

いつも明るく、姜維を励ましたり、支えたりする自分の師の面影はそこにはなかった

「確かに私は多くの人々をこの手にかけてきました。ですが、馴れるということはありません。いいえ、馴れてはいけないのです。人を殺すことに馴れてしまつては、例え英雄と呼ばれるような功績を打ち立てても、平和な時代がやってきても……私は私として笑うことができなくなるでしょうから」

それは法正の心に巣食う恐怖

だが、失つてはいけないものである

姜維は師の言葉に喉をならした

「だから……あなたもその恐怖を捨てず、馴れず、忘れてはいけません」

「はい、月歌様……ありがとうございます」

礼をする姜維に法正は微笑む

「さあ、もうすぐ敵がくるよ。準備はいい？」

「はいっ！大丈夫です」

姜維の震えはおさまっていた

敵部隊の足音はすぐそこまで迫っていた

第三話 初陣、忘れてはいけない恐怖（後書き）

最後の主人公たちの会話、もうちょっとうまく書きたかったのですが・・

これが今の私の限界です

なので、もっとうまく表現できるように皆さまからのアドバイス待っています

次話は日付が変わる頃には出したいと思っています

第四話 温もりを求める心（前書き）

やっとできた・・・

長かったです、ホントに

もうキーボードの叩き過ぎで指が痛い

ついでに話の内容も穴だらけ・・・

なので、温かい目でみていただきたいです

「こつしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待つてます！！

第四話 温もりを求める心

黄巾党・奇襲部隊内部

「官軍の陣までもう少しだ、な」

奇襲部隊の指揮官はこの波才という男だった

まだ若く、引き締まった体に整った顔立ちをしている

頭には黄巾党の証である黄色い頭巾がある

「この奇襲で少しでもこちらの被害を小さく出来ればいいが・・・」

彼は二千の兵を率いて孫呉の陣を目指している

奇襲の案は彼の出したものであり、彼は黄巾党の中で数少ない兵をまとめる将の器をもつ者だった

黄巾党の大半は食べるものに困った農民である

必然的に將の器を持つ者は少ない

そんな中で彼は非常に優秀であった

数の多さに驕ることなく、いくつもの官軍を破ってきた

周瑜たちが奇襲を事前に知ることが出来なかったのは、波才が官軍の將の名を聞き、仲間を助けるために急遽援軍として参戦しようとしたためである

事は急を要するものだったため、部隊の規模を小さくし、進軍速度に重点を置いていたため、周瑜の放った細作に見つからず、時機的にもこれほどはないと言えるほどの好機に接敵することとなりそうであった

だからこそ街にいる仲間と連絡を取り、時機を合わせて奇襲・挟撃の作戦を取ることにしたのだ

「敵陣が見えたぞー！！」

前方で声が上がった

それを聞き、波才は全軍に突撃の指令を出すのであった

呉陣営南部

敵軍の到来を姜維もまた肌で感じていた

（これが・・・戦場なんだ）

初陣で比率が一对千なのだ、怖くないと言えば嘘になる

だが、彼女の隣にいるのは自分の姉であり師でもある、この世界でもっとも信頼している女性だ

彼女が隣で立っているだけで不思議な安心感があつた

（大丈夫っ！わたしはやれる！お姉ちゃんの教えをずっと受けてきたんだから）

自己暗示のようなものだったが、それは自信につながった

隣にいるのは不可能を可能にしてきた女性、その力で数多の困難を切り裂き、その頭脳で幾多の難題を解決してきた英雄だ

（だから、わたしたちが負けることはない！！）

姜維の表情から硬さがとれた

それを横目で確認し、法正は腰に下げていた剣を抜いた

二本下げているが、抜いたのは一本だった

刀身の白い片刃の直刀を片手で持ち、両腕を下げた状態で軽く深呼吸をする

両目を閉じて精神統一を行う

敵の戦鬪が陣の内部に侵攻してきたとき、閉じていた目をゆっくりと開いた

「・・・第一幕の開幕ですね」

瞬間、数十メートルもあつた彼我の距離がなくなり、目視の困難なほどの速さで腕を振るった

先頭の男はいきなり目の前に現れた（ように見えた）女に驚くが、敵陣だということを思い返し、己の武器である斧を振るおうとする
だが、腕が動かない

何があつたのかと男が腕を見やると、肘から先がなくなっていた

「う、うわああー！！！」

遅れて痛みを感じた男は叫びながら突っ込んできた
それを軽くかわし、一閃、今度は男の足を切断した

男にとってはあまりに衝撃的だったのだろう、泡を吹いて気絶した

「さて、次は誰？」

剣を振り、血糊を飛ばしながら呟く

周囲は敵軍が陣の内部に入り込んだようで騒然としている

法正は獲物を狙う獣の目で敵を睨み、駆け出した

敵軍の真ん中にむけて

姜維は改めて自分の師の強さを確認すると彼女が囲まれないように動く

あちこちに張つてある幕には木で細工してあり壊すことが出来なくなっている

だからこそ法正の背後に回り込ませないように、彼女の横に体を潜り込ませながら抜刀する

片刃で反り返っているその剣を構え、前方の敵に向けて振るう

法正と比べると遅いが、その一振りは農民出身の黄巾党にしてみれば十分に速かった

その一撃は正確に敵の武器を持つ腕を切り落とし、返す剣で側面から攻撃を仕掛けてきた敵を切る

必要以上に力が入っていたためか、あるいは剣の切れ味が良すぎたのか、敵は胴から真つ二つに切れて息絶えた

目前であまりにあっさりと人の命を奪ってしまったため、剣を見つ

めて呆然としてしまった

そんな隙だらけな状態を敵が見逃すはずもなく、三人の黄巾党が姜維に襲いかかる

慌てて剣を振るが、焦っていたため剣筋が甘くなり簡単に防がれてしまった

そのまま鐔迫り合いになるが、残る二人が左右からそれぞれの得物を振る

だが、そこへ二本の小刀が飛んできて敵の腕に刺さった

男たちは腕を押さえる

姜維と鐔迫り合いをしていた敵の注意もそっちに流れたのを感じ、重心をずらして相手の体勢を崩しながら剣の刃を走らせ、腕を振りぬく

そのまま右に飛び、腕を押さえる敵を切り伏せる

左側の敵は法正がもう一本の小刀で仕留めていた

陣内の出口は南と北の二か所しかなく、法正と姜維の二人を倒さない限り前に進めない

そのため、二人を倒すために全軍を突撃させる

二人は少しずつ後退しながらも応戦し続ける

たった二人に黄巾党の奇襲部隊二千は見事に足止めされていた

（陣内に全ての敵が入ったね！）

法正は小刀を数本取り出し、あちこちに投げる

すると、陣内の入口付近の木が倒れ出した

最後尾の黄巾党たちは慌てて前方に逃げる

大きな音をたて、木々が砂埃を巻き起こしながら倒れる

砂埃がはれると陣の入口は木で封鎖されていた

敵が後方を見ているため、少し間ができた

さすがに寝ていないので二人とも少しだが息が上がっていた

「桜、もう少し耐えてね？」

「少してどれくらいですか？」

見事に戦っているが姜維は初陣なのだ
体力はまだ残っているようだが、精神の方が先に疲れてしまったの
だろう

「・・・来たみたいね」

後方から激しい足音とともに硬い物をぶつけあったような音が聞こ
えてきた

黄巾党の本隊が攻撃を開始したようだ

「さあ、第二幕の始まりよ!!」

法正はそう言うとき姜維に黄色い頭巾を渡し、身をひるがえす
頭巾を受け取りながら姜維もあとにつづく

「そういえば、まだ策の全容を聞いていなかったんですが？」

「そういえばそうね。とりあえず私たちの役目はこれを身につけ、
敵の本隊に攻撃を仕掛けることよ」

法正はそう言いながら黄色い頭巾を身につける

「・・・これをですか？」

姜維は渡されたそれをつまみながら尋ねる
かなり嫌そうな顔をしている

「・・・私もがまんしているのだから文句を言わないで身につけな
さい」

奇襲部隊から奪った黄色い頭巾は汗にまみれて湿っているのだ
少し汗臭くもある

よろこんで身につけるのは特殊な趣味をしている者だけであろう
もちろんこの二人にそんな趣味はない

「・・・わかりました」

姜維は諦めて黄巾を身につけるのだった

呉陣営北部

時間はほんの少し遡る

周辺から人の気配はまったくなかった

孫策たちは兵を少数ごとにわけて陣の内外の様々な場所に伏せさせたのだ

「・・・もうすでに始まっているようだな」

周瑜は誰に告げるでもなく言った

彼女は陣の外に伏せている

（しかし・・・本当にたいしたものだな）

法正たちのことであろう

たった二人で数千の敵を足止めしているのだ

その証拠に未だ敵兵の姿を見ていない

（文武両道にして先読みとまでいえる直感、か。やはり敵にはまわしたくないな）

彼女の見つめる先はすでに目の前の戦ではなくなっていた

「ふわぁー・・・まだ来ないのかしら？」

孫策は天幕の裏側であくびをしていた

鉄の打ち合う音はすでに聞こえているのもう少しなのだろう
だが彼女は緊張とは無縁のようだ

（それにしても・・・法正たちがここまでできるとは思わなかったわね）

孫策も法正たちの強さを認めた

自分と同じで勘が働く女、それでいて自分の相棒（周瑜）と同程度の知略も持っている

それだけで十分なのに武もあるのだ、これはもう反則といっていいだろう

（ホントにうちに来てくれないかしら）

先程は周瑜の言葉を否定したが、孫策自身も彼女たちは仲間になってほしいと思っていた

（この先にあるのは戦乱の世の中・・・あの二人の力は呉のためになる）

周瑜と同じで、孫策もまた目の前の戦ではないものを視ていた

「やはり法正とはどこかで一度会っておる気がするんじゃない」

孫策とは反対側の天幕の裏側で黄蓋はつぶやいた

実は一目見たときから懐かしさのようなものを感じていたのだ

（法正という名もどこかで聞いたような気がするんじゃないが・・・どこだったかの）

自分の記憶を思い返してみても全く思い当たらない
ただの勘違いかもしれない

（あとで本人に聞いてみるとするかの）

黄蓋も目の前の戦ではなく、今後のことを考えていた

・・・他の二人よりも私的なことではあったが

（三十分後）

北側から敵軍の足音が聞こえてきた

一万人もの人が同じ方向に走っているのだ
砂埃が巻きあがっている

（来たか・・・あとは法正たち次第だが・・・っ！！天運も味方しているのか！？）

何かが倒れるような大きな音が南側から聞こえてきた
舞台は彼女の策の第二段階へ移行したのだ

（最後の答え合わせは・・・おそらく大丈夫だろう）

周瑜も法正の策の全てを聞いたわけではない
聞いたのは姜維から聞かされた内容だけであり、姜維の知っている
ことと同じだけなのだ

それでも自信をもって大丈夫と考える
法正の信頼度はそれほどまでに高くなっていた

孫策と黄蓋は兵たちとともに息をひそめて敵の通過するのを待つ
前方で戦い始めたら、合図によって横から奇襲を仕掛ける手筈にな
っている

そのための機を、息を殺してうかがっていた
最後の舞台に登るために

法正たちは目前に迫る敵軍に少しも臆することなく突っ込んだ
黄巾党は彼女たちが黄色い頭巾を身につけているのを見て、仲間だ
と思ったようだ

武器を持って一目散に走っている様子は敵の官軍から逃げているの
だろうと考えたのか、武器を構えることもしないで、彼女たちの後
ろを睨みつける

弓を構えていた黄巾党たちが前方からの足音を聞きつけ、矢を放った
この矢に法正たちを追いかけていた黄巾党の兵たちはひるんだ
仲間に見える者たちから攻撃を受けたのだ
だが、誰かが叫んだ

「あいつらは官軍が変装しているに違いない！！迎え討て！！！」
その叫びに呼応するかのように奇襲部隊から雄たけびがあがる
前方の黄色い頭巾を身につけた軍勢を官軍と認識したようだ

実際は法正が奇襲部隊のひるんだすきに身をひるがえし、彼ら内部
に潜り込んで叫んだのだ、声音を少し低いものにして

こうして奇襲部隊と本隊の黄巾党同士での戦いが始まった
本隊としても、前方の部隊は敵ではないと考える者も多数いるため、
奇襲部隊の激しい攻撃を防いではいるが、地形が限られているので、
同数程度でぶつかり合うことを余儀なくされる

そうなってくると黄巾党は今まで街や村を襲い、一般の平民を相手
にしてばかりいたのだ防戦という馴れない戦いでは苦戦を強いられる
そして反撃する者も出始める

こうして黄巾党は自分たちの手で数を減らしていった

「最終幕も無事に開幕かな」
すでに奇襲部隊の背後に出ていた法正はつぶやく

「それで、あなたは黄巾党の将ですか？」
眼前の戦鬪を眺めながら背後に声をかける
一人の男が歩いてきた

「・・・気付いてましたか。そういうあなたは官軍の将ですか？」
法正の背後に現れたのは波才だった
彼はすでに武器を手に持ち、臨戦態勢だ

「いいえ、私はただの旅人ですよ。この軍には一宿二飯の恩で協力
しているだけです」
「・・・そうですか。まあ、いまさら官軍の将を倒しても我々の負
けは変わりませんね」
そう言って武器を捨てた

「・・・投降するんですか？」
「いや、このままあなたに討たれようと思ってね」
「・・・それでいいんですか？」
「ああ・・・覚悟は出来ていた。例え自身が餓死しようとも何の罪
もない平民たちを襲って生きてきたんだ。これは天罰なんだよ、き
つと」

波才はそう言ってその場に座った

「さあ、ひと思いに首を切ってくれ」
「・・・」

目をつむり、座り込む波才に法正は黙って近付く

「失礼します」パチィ！！
法正は思いつきり波才の頬を叩いた

「！！何を「何故死のうとするのですか？」っ！それは自分の罪を

「あなたが死んだぐらいであなたの奪ってきた命が報われるとでも言うのですか？」・・・それ以外に罪を償う方法は「あなたが死のうとしているのは罪の意識からの逃げでしょう？」くっ！俺が逃げているだど！！なら貴様には分かるのか！？たくさんの命を奪ったことに対して俺のできる償いが他にあると！？あるならやって「本当にちゃんと考えたのですか？」っ！！なら貴様にはわかるのか！？この俺のきも「あなたの気持ちなんて分かりませんよ。私はあなたではないのですから」っ！なら貴様が俺に偉そうに語る資格は「いい加減に気付きなさい！あなたは死にたくないのでしょうか？」！！！！」

法正はそう言つて波才を抱きしめた

「生きたいと望むなら生きればいいではないですか？」

「だが、おれは・・・」

「生きて今まで殺してきた人々よりも多くの人を救えばいいではないですか？」

暴れる子供をあやすように、法正は波才の背中をさすりながら言った

「これが人の温もりです。この国はこれからこの温もりが消えていくでしょう。親を失った子供はこの暖かさを知ることができないのです。恋人を失った者は殺した相手を憎むでしょう。そういった負の連鎖を断ち切れるものが、今この国には必要なのです。あなたのような思いを抱くものが償いを行う場所はそこにありますよ」

そう言つて波才から離れる法正の顔には優しい頬笑みが浮かんでいた

「俺は・・・生きていてもいいのですか？」

「それを決めるのは私ではありません。他ならぬあなたですよ」

法正の言葉に波才は考える

自分は本当に生きていていいのかと

今まで奪ってきた命は両手両足の指では足りない数だ

彼女の教えてくれた温もりも奪ってきたのだ
それでも生きていていいというのなら

「俺は・・・生きたい！生きて今まで奪った命に償っていききたい！」

「答えが出たのなら早くお行きなさい」

「・・・いいのですか？」

波才は黄巾党の将だ

その首を取ることは朝廷の命令でもある
逆らえば彼女が朝敵となってしまう

「この場に黄巾党の将がいたという証拠はありません。私のことは大丈夫ですから」

彼女の頬笑みは変わらない

慈愛に満ちたその顔に波才は再び涙した
そして、黄巾をはずしてひざまずいた

「私の名は波才と言います。真名は刀夜です。この度は本当にありがとうございました。いずれ必ずあなた様のお力になることをここに誓います」

それはまるで西洋の騎士の誓いのようにであった

波才はここに法正への忠義を誓ったのだ

「そこまでしなくてもいいのですが・・・分かりました。その言葉に偽りはありませんね？」

「はっ！天に誓って」

「よろしい。では私の名は法正、字は考直。真名は月歌です」

法正は波才に真名を与えた

波才は頷き、立ち上がった

「真名までお赦し頂き、ありがとうございます」

「では、そろそろ行きなさい。黄巾党の殲滅が始まりました」

そう言つて法正は黄巾党の残存兵の元へと歩き出した

波才も振り返り歩き出す

両脇の天幕はすでになく、外へと走っていく

まずは罪を償おうと心に誓つて

法正が波才を抱きしめていたところ、姜維は黄巾党の数がかなり減つたことを確認し、合図をだした

彼女は外套の中に入れていた小さな銅鑼を剣の峰で叩いたのだ
それを合図に黄巾党の左右にあつた天幕が崩れ、呉の兵たちが雄たけびを上げながら攻撃を開始した

同志討ちをしていた黄巾党はおおいに混乱し北側へと走り出す
奇襲部隊は南側が封鎖されているのを知っていたため、本隊は前方の黄色い頭巾を身につけた者たちがまだ攻撃をしてくるのではない
かと思つたためである

だが、彼らにとってはおおいに残念なことにすでに北側の出口も封鎖されていた

官軍の本隊によつて

「・・・来たか。弓兵構え！！・・・射てえー！！」

弓の斉射により多くの黄巾党たちが倒れる

北側に現れた呉軍に黄巾党たちはたたらを踏んだ

「足が止まつたな。全軍突撃だ！！われらの敵を殲滅せよ！」

本隊に突撃令を出し、周瑜は孫策にどんな説教をするかを考えながら、この後どこで休むのかに頭を悩ませた

孫策も突撃する兵に混じるといふことは彼女の中では決定事項だった

「全軍突撃！我らの陣を襲撃してきた愚かな黄巾党どもを殲滅するのよ！！」

孫策もまた突撃の指示を出していた

黄巾党の混乱はすでに最高潮だ、この突撃で終わりだろう

「さうて、私も突撃しましょ、っと」

そう言つて南海霸王を抜き、敵軍の真つただ中に突つ込む
その中に姜維を見つけた

「あら？姜維じゃない。お疲れなら下がってもいいのに」

「あなたの方こそ下がっているべきではないのですか？」

孫策の言葉に姜維は呆れながらも言い返す

彼女はこの軍の頂点だ

彼女がここで討たれても黄巾党の敗北は変わらないが、呉の受ける
打撃も大きいだろう

「私の睡眠を妨げたんだもの。私自らが報復しなきゃ。それだけの
権利はあるはずよ」

「・・・あとで周瑜殿に報告しますよ」

「それだけは勘弁してほしいかな」

そんなことを言いながら彼女は全く下がろうとしない
その様子に姜維は改めて周瑜の苦勞を感じるのだった

孫策たちとは反対側でも黄蓋が突撃の命令をだしていた
・・・眠そつに眼をこすりながら

「その様子では前に出ても危ないですね。私が代わりに行きますので後方で休んでいてください」

法正が現れる

黄蓋はその言葉に口元を歪めると言い放った

「この程度の方が今はちょうどよいじゃろう。殲滅なのだから全力でなくとも問題ない。儂よりもお主は大丈夫かの？先程から戦えばなしなんじゃろ？」

逆に黄蓋が尋ねてきた

「弟子がまだ戦っていますから。師が安全な場所では私の立つ瀬がなくなってしまう」

「はっはっは、違うない」

二人は笑顔をかわし、背中合わせで周りの敵を倒していった

～一時間後～

後の陣内に残っていた最後の黄巾党も討たれ、官軍の勝利に終わった

「我らが敵の殲滅は終わった！！皆の者！勝鬨を上げよ！！！」
孫策の声で兵たちが叫び声を上げた

長い夜は明け、日出が見えていた

第四話 温もりを求める心（後書き）

とりあえず疲れました

穴の部分への突っ込みは今後への糧にします

どんな言葉でもいいので感想が欲しいです!!!

次話については明日中に載せますので、今後ともよろしく願います

第五話 朝日に包まれて（前書き）

サブタイトル考えるのって難しいですね
今回は適当につけてしまいました・・・

あと、今回は短めです

次は長くなると思いますのでここで区切りました

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第五話 朝日に包まれて

第五話

孫呉陣内

長かった夜も明け、日の光があたりを照らす

今回の黄巾党との戦による被害は軽微なものだった

ただ、陣内での戦闘だったために後片付けは大変だった

ほとんど寝てなかったこともあり、簡単に黄巾党の死体を片づけた後でご飯を食べ、休憩する運びとなった

「・・・眠い」

「もう少しで終わりますからしつかりしてください」

この二人はまったく寝てないのだ

戦でも一番動いていたのだ

心身ともに限界に近いのだろう

「・・・先に寝ててもいいぞ？」

そんな二人に周瑜は告げた

「そうね。あなたたちのおかげで勝てたようなものだし・・・」

「たしかにの・・・お主らが休んでいても誰も何も言わぬぞ？」

孫策と黄蓋も同じように言った

周りで片付けをしていた兵たちも頷いている

「だそうですよ？」

姜維は法正に視線をむける

まるで「答えはわかってます」とでも言いたげに微笑んで

「・・・ふう。桜も性格が悪くなってしまつて・・・お姉ちゃん悲しい」

両手で顔を覆いながら、法正は姜維をからかう
孫策たちは笑いながらその様子を眺めている

「・・・わたしの性格が悪くなつたとしたら、原因はあなたですよ？」

そう言つて姜維は溜息をつく

「さつきはあんなに可愛かつたのに・・・反抗期なの？」

さつきとは戦の直前のことだろう

一瞬にして姜維の顔は真つ赤に染まる
相当恥ずかしかつたのだろう

「・・・それをここで言いますか？」

何かを抑えるように姜維は低い声で言う
若干涙目になっている

「なにになに？さつき何かあつたの？」

そんな姜維の様子に孫策は興味深々と言つた感じで聞く
黄蓋はもちろん周瑜まで何があつたのか聞きたそうだ

「べ、別に何もなかつたでしゅよっ！？」

姜維はどもりながらも否定する
だが嚙んでしまったため、さらに顔を赤くして俯いてしまう

「そうね、初陣が怖かつただけだもんね」

「っ！！なんで言つちゃうんですかっ！！」

笑顔で言い放つ法正に姜維は怒鳴る

そんな姜維を法正は撫でる

「自慢したかったただだよ？自慢の妹を・・・」
目を細めながら嬉しそうに法正は語る
その姿に姜維は何も言えなくなる

「・・・あなた、初陣だったの？」
孫策は目を見開きながらも問いかける
相当驚いているようだ
いや、孫策だけではない
話を聞いていたものは皆、似たような表情をしている

「はい。この子は今回の戦が初陣でした」
法正は誇らしげに言い放つ

「・・・初陣であれだけの活躍、か。たいしたものだな、まったく」
「・・・確かに、初陣であれだけ戦えるものはそうはおらんぞい？」
先程まで法正の凄さにはかり目がいつていたが、初陣でここまで活躍した姜維の凄さを改めて理解した
どれほど優秀な師についても初陣は体が硬くなり、普段の力など出せないものだ
しかも今回は熟練の将であっても不可能に近いことを成したのだ
不眠の状態でありながらもたった二人で二千の敵を相手にした
その後には殲滅戦にも参加し、孫策と背中合わせで戦った
初陣である戦果ではないだろう

「そんなにすごいことなんですか？」
だが、姜維は首を傾げながらそんなことを言った
身近にいる例が法正だけだったため、自分の成したことの凄さをいまいち理解できていないようだ

その様子にあたりが苦笑いを浮かべる

「・・・たいしたものね」

姜維をみつめながら孫策はそうつぶやいた

「そつ、そんなことより早く片付けてしましましょう!」

みな視線が自分に集まっていることを感じた姜維は話題を逸らすとする

「そつといえばそうね。早く終わらせちゃいましょう」

法正はそう言って歩き出した

皆は姜維の話のせいで、その前に話していたことを忘れていたただ、法正たちの眠気は収まったようだった

死体の片付けも終わり、皆で少し遅めの朝食を食べていた

片付けたとはいえあちこちに飛び散る血の痕は一般兵の食欲を著しく低下させていたため、多くの者が残っていた

孫策たち首脳陣はほとんど気にせずに食べていた

法正も自分の分をしっかりと食べ終えたのだが、隣の姜維がほとんど食べていなかった

「桜、もついいの?」

「・・・はい、おなかいっぱいです」

法正の問いかけにも弱々しく反応するだけであった

そんな様子を孫策たちは心配そうに見ていたが、法正に任せようと考えていた

天幕はすでに修復していたので、食後はみなすぐに自分の天幕に入

り、眠った

孫策たちは法正たちにいろいろ聞きたいことがあったのだが、先程の姜維の様子から、また眠気もあったことから起きてから聞こうと思ひ、眠りについた

（一時間後）

見張りの者を残し、皆が寝静まったなかでとある天幕から人の話し声が聞こえてきた

「・・・そろそろいいかな？」

法正たちの天幕だ

「・・・本当にいいのですか？皆に何も言わずに出て行ってしまつて」

姜維は少しだけ元気を取り戻していた

少し横になっていたため、楽になったのだろう

「皆が起きたらいろいろ聞かれるだろうからね・・・全部話さないといけなくなりそうだし、それは面倒だからね」

法正はそう言つて天幕を抜け出した

姜維もそれに続く

「・・・起きてたんだ」

天幕を出た先には孫策が腰に手を当てて待ち構えていた

「やっぱりね、そんな予感がしたのよね」

孫策の勘は二人がこのまま何も言わずに去ることを感じていたようだ

「ええと、これは、あの・・・その・・・」

姜維は言い訳を考えるが、見つかるとは思っていなかったため、何も思い浮かばないようである
そんな様子に孫策は微笑む

「別にひきとめたりしないわよ、ただお礼が言いたかっただけ」
孫策は肩をすくめながら言った
法正もこの様子には苦笑を浮かべた

「・・・今回はあなたたちのおかげで助かったわ。ありがとう」
表情を真面目なものに変えながら、孫策はそう言って頭を下げた
その姿は威厳を持っていて、姜維は雰囲気にも吞まれそうになった
だが、姜維に頭をなでられると落ち着きを取り戻した

「たまたまですよ。それに今回のことは一宿二飯の恩を返したただけ
ですから」
法正はにこやかに言った

「ふふ、そう言うと思った」
顔を上げた孫策の顔も笑顔だった

「お礼のついでにもう一つ受け取ってほしいものがあるのだけど・・・」
「」

「なんででしょうか？」

「私の真名よ、雪蓮っていうの」

孫策は法正と姜維に真名を赦したのだった

「・・・私の真名は月歌よ」

「私は桜です」

二人も笑顔で真名を告げる

「そう・・・月歌に桜、またいつか会いましょう。一緒にお酒でも飲みながら話を聞かせてちょうだい」

「そうね、あなたとは楽しく飲めそうね」

「・・・わたしは周瑜殿と苦労話をしよっかな」

二人は笑顔を、一人は苦笑を浮かべながら言った

「それじゃあ雪蓮、また戦場ではない場所で会いましょう」

「周瑜殿と黄蓋どのによろしくお伝えください、雪蓮さん」

「ええ、伝えておくわ。二人とも、またね」

そう言っただけで法正たちは陣の外へと出た

孫策は二人の背が見えなくなるまで見つめていた

「さて、私も寝ようかな」

孫策は自分の天幕へ戻って行った

第五話 朝日に包まれて（後書き）

なんかグダグダになってしまった・・・
まだまだ暑くてだらけてしまいがちですが、
今後も頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします

第六話 その身に背負う罪（前書き）

今回は少し時間がかかってしまいました

長くはないんですが・・・話も全然進まないし・・・シリアスな感じだし

でもこれが私の限界です

なので、暖かい目で見守って（？）ください

「こつしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第六話 その身に背負う罪

森の中

孫策と別れのあいさつをおえ、法正たちは森の中を歩いていた
太陽はすでに沈み始めている

「同じ月見上げるゝ夜があるのならば」

「・・・」

二人はここまで一言も言葉を交わしていない

法正は一人で歌っている

その後ろを黙って姜維が歩いていた

「ふう・・・さて、今日はこのあたりで休みましょう」

少し開けた場所で法正は立ち止まりながら言った

「・・・あ、はい」

姜維は小さな声で答える

顔を上げようとしてもしないでいた

「・・・少し休んで下さい。何か食べれる物を探してくるから」

「・・・お願いします」

そう言って法正はその場を離れた

姜維は近くの木にもたれかかり、目を閉じた

（わたしは・・・人を殺したんだ、殺しちゃったんだ）

閉じた瞼の裏に浮かぶのは自分の殺した相手の死に際の顔

信じられないといった顔、恨みの込められた目、苦しげに歪む口元
そのどれもが自分を責めているように感じられた

（月下様は人を殺すことに対する恐怖を忘れるなど言っていたけど・
・・こんなの耐えられないよ・・・）

閉じた眼の奥から涙が溢れてくる

それは後悔か、はたまた自分の心の弱さに対する悔しさか

生まれたての小鹿のように震えながら、少女は嗚咽を漏らした

木々はざわめき、少女の嗚咽を覆い隠す

欠けた月のみが少女をやさしく照らしていた

「あつ！キノコみつけ！！おつ！あの木の実はいくら食べれるやつだ！」

両手にたくさんのおもちゃを抱えていた

この森はあまり人が入っていないらしく、様々な動物も見受けられた

「よし！これだけあれば十分でしょう」

法正は満足げに頷き、もと来た道を引き返す

「・・・桜はまた抱え込んでるみたいだしね」

先程の姜維の姿を思い返す

俯いたその姿は、まるで見えない重圧に耐えているかのようなだった

法正にも身に覚えがある

初めて人を殺めたとき、同じように塞ぎ込んでいた

その時は幼馴染に助けられた

奪った命の重さを背負う覚悟をもらったのだ

（あの子・・・元気にしてるかな？）

優しい彼女のことで、今の時代に心を痛めているに違いない

人を殺さなければ自分が殺されてしまうこの時代

そんな時代は彼女には似合わないと思つた

（まあ、桃香なら時代を変えようと立ち上がるかもしれないかな）
それはありえそうだと、法正は笑いながら歩く

（さて、桜は覚悟できるかしら。命を背負う覚悟を・・・）

今姜維のそばには自分しかない
なら、彼女を立ち上げさせるのは法正の役目だ
あの日の彼女のように

（あの子だけは何があっても守り抜くんだ）
心にそう強く誓った

「ただいま」

「あつ・・・お帰りなさい」

法正が戻ってきたことに気づき、姜維は慌てて眼をこする
泣いていたことを知られたくないようだ
そんな少女の強がりに法正は溜息をつく

「私は悩みを打ち明けるには役不足かな？」

「そんなこと・・・ないです」

「なら・・・なんで泣いていたことを隠すのかな？」

「これは・・・」

姜維はまた俯いてしまった

その姿にかつての自分を重ね合わせた法正は

（これは・・・桃香じゃなくても放っておけないものね）
などと内心で苦笑する

法正は採ってきた物を置き、姜維に歩み寄る

「泣くことは恥ずかしいことじゃないよ？涙は人間の証。こころが

あることの証明なんだから」

「でも・・・」

「どこか怪我して泣いてるんじゃないんでしょう？」

「・・・はい」

「なら、それはこころの痛みよ。こころが痛くて涙が出るの」

「こころが・・・」

「そう。人はね、こころがあるから笑えるし、怒れるし、泣けるの。動物と違ってね。」

「・・・」

「そして、そういつた感情を他の人に伝えるのが言葉。人が言葉を生み出したのは意思の疎通を行いやすくするため。言葉は人の生み出した、自分の感情を相手に伝えるための最適な手段なの」

「言葉が・・・」

「だから・・・あなたが何を思い、何を考え、悲しんでいるのか私に教えて？」

法正はそう言つて、優しく微笑みかける

恥ずかしくなんてないんだよ、と

「・・・殺した人の顔が浮かぶんです・・・怒った顔や悲しそうな顔が・・・そしてわたしを責めるんです・・・なぜ殺したのかと・・・なぜ自分が殺されなきゃいけないのかと・・・わたしを呪うって・・・それが怖くて・・・でも忘れるわけにも・・・馴れるわけにもいかないって・・・この先もずっとこうなのかなって・・・そう考えると耐えられなくて・・・」

涙があふれ、嗚咽が漏れる

そんな姜維を法正は抱きしめる

「私の言ったこと、ちゃんと覚えてたね」

「グスッ・・・はい」

「確かに私たちは多くの人の命を奪った。どんな理由があってもそ

の事実是不変わらない。

けどね、その罪を背負わなければならないの」

「罪を・・・背負う？」

「そう・・・人を殺したって事実を胸に刻み込んで、その重さに耐えながら前に進むの。もし、それができないのなら・・・あなたは剣を捨てなさい」

「・・・えっ？」

何を言われたのかわからない、といった表情をする

法正は腕をほどき、姜維の肩をつかみ、目を見つめる

嘘は許さないとも言つかのように

姜維はそんな法正の圧力に目を逸らすこともできない

「剣を捨てたとしても・・・あなたは私の妹よ？ちゃんと守ってあげるから安心しなさいな」

「そんな・・・わたしは・・・」

「別に背負えないことは問題じゃない、ここで無理してあなたの心が壊れることの方が問題なの。あなたは私の大事な妹。血はつながってなくてもかけがえのない家族なの。だから・・・絶対に無理な選択はしないで・・・私みたいに戻れないところまで・・・来ちゃ・・・だめなんだから」

感情が爆発してしまったのだろう、法正が涙を見せる

姜維は動揺してしまった

今まで長い間彼女とともにいたが、涙を見せたのは初めてだった

どんなに辛いことがあっても涙は見せずに自分を励ましてくれた彼女の涙は姜維の心に深く響いた

自分のことをこんなに心配してくれる人がいるという事実に、こんなにも深く愛してくれているという事実にこころがゆれる

自分はこの人に何をしてあげられるのかと、今まで多くのモノを与えてくれた人に何かできないのだろうか

目を閉じて自分の心に問いかける

（人を殺したという罪を背負う・・・確かにつらいことだ・・・剣を持つということはこれからもあの苦しみを抱えていくことになる・・・でも、お姉ちゃんはいっしょに背負っているんだ。背負いながらも笑っているんだ・・・苦しさをこころに隠して、わたしに心配させないように・・・なら！！）

姜維は目を開く

決意に満ちた瞳は目の前で泣いている女性を映した

この人と共に行こう、この強くて弱い自分の姉と

決意した姜維は口を開く

「わたしは・・・私はお姉ちゃんと一緒に背負う・・・罪を・・・お姉ちゃんが今まで一人で背負ってきたモノを・・・だから、もう一人で全てを背負わないで？私は大丈夫だから・・・罪の重さに潰れたりしないから・・・一緒にいこ？」

そう言っただけで法正の涙を拭く

その瞳にもう迷いはなかった

「・・・重いよ？ときどき夢に出てくるんだよ？人を殺しておきながらなんでお前は笑ってるんだって、絶対に許さないって・・・とつてもとつても重いんだよ？それでもいいの？」

「・・・お姉ちゃんは今までずっと背負ってきたんでしょ？ずっと苦しんで、でも私には絶対に見せないで・・・これからは私も背負うから・・・大丈夫だよ？お姉ちゃんが一緒にいてくれるなら私は潰れない、潰されたりなんかしない！」

「さくら・・・ありがとう」

「ありがとうはこつちだよ。今までありがとう・・・これからよろしくお願いします」

「こちらこそ・・・よろしくね」

二人はそう言うと、もう一度抱きしめあい、泣いた

それは悲しみや恐怖からくる涙ではなく、嬉しさに満ちたものだった

「それにしても・・・お姉ちゃんが泣いてるとこ、始めてみたな」
「・・・／＼」

「あれ？お姉ちゃん赤くなってるの？可愛い」

泣きやんだ二人は先ほど法正の採ってきた物を食べていた

姜維は師弟の関係になってから使い始めた敬語をやめた

先程の法正の涙に家族としての絆を感じ、どこことなく他人行儀にな
ってしまう敬語を嫌ったためだ

「・・・あまりからかわないでよ、もう」

「いつつもからかってたのはそっちでしょ？」

普段とは立場が逆になっていた

法正は自分があそこまで泣くとは思っていなかったため、また、妹
の前でかなり泣いてしまったため恥ずかしいようだ

「ふう・・・さて、少し真面目な話をするよ？」

「・・・はい」

法正の真面目な表情に姜維も気を引き締める

先程の話の確認だろうと姜維はあたりをつけた

だが、実際に法正の言葉は

「今後の目的地だけ・・・ひとまず幽州を目指すわ」

「えっ？」

「どうしたの？」

「あっ・・・えと、さっきの事を確認するのかと思ってたら・・・」

姜維の予想は外れた

そのことについて言うと

「確認？ 必要ないよ。あなたの目を見ればわかるから」

目を細めながら答えられた

その様子に姜維は少し赤くなる

「で、幽州にある私の故郷である村を目指そうと思ってるの」

「お姉ちゃんの故郷？」

「そう・・・私の師が愛した桃園があるから、そこに師匠のお墓を造ろうと思って、ね」

「・・・そうだね」

法正の師はすでにこの世にいない

旅先で命を落としている

彼女の骨の一部を法正は持ちかえり、墓を造って埋めようと考えていた

そのことを知っていた姜維は賛成の返事を返した

姉の故郷を少しでも楽しみにして

その後は雑談をしながら食事をした

「それじゃあ、そろそろ寝ましようか」

月が真上に登るころ、今までの話を切りの良いところでやめ、法正は言った

「そうだね・・・あの、お姉ちゃん？」

「ん、どうかした？」

姜維はもじもじしながら法正に声をかけた

その様子を不思議に思いながらどうしたのかと尋ねる

「その・・・こつ、今夜は隣で寝ちゃだめ、かな？」

普段野宿するときは真ん中に火を挟んで向かい合う位置で寝ている
だが姜維は一緒に寝たいようだ

「ふふっ」

そんな姜維に法正は微笑む

「もちろんいいよ？」

「・・・／＼」

真つ赤になりながら法正の隣に移動する姜維だった

「それじゃあお休み、桜」

「お休みなさい、お姉ちゃん」

二人は仲良く並んで横になった

「あの・・・お姉ちゃん？」

「ん？」

「その・・・手、つないでもいい？」

「いいよ・・・ほら」

「ありがとう・・・／＼」

二人は手をつないで眠った

月が優しく二人を照らしていた

第六話 その身に背負う罪（後書き）

この話ももつと上手く表現したかった・・・

ですが前書きでも書いたように、これが今の私の限界です
なので感想やアドバイスをください、お願いします

ちなみに今回前半部分で法正の歌っていた歌は三国志の作品（？）
に係している歌の一部分です

何の歌が分かった方はご報告ください
曲名を知りたい方も同じようにご報告ください

次話は明日中には載せる予定です

第七話 帰郷、集う星の輝き（前書き）

変なところで区切ってしまった気がする・・・

というか話がぐだぐだです

小説ってやっぱり難しいですね

至らないところだらけですが「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきま
すので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第七話 帰郷、集う星の輝き

幽州？県

「・・・こつちで本当に大丈夫なの？」

「はあ・・・少しは私を信じてよ」

「だって・・・いつも勘で動くし、勘が働かないときは方向音痴だし」

「故郷の方角ぐらいちゃんと覚えてます！！」

孫策たちと別れてから今日で四十日目

二人は幽州？県にある楼桑村を目指している

途中いくつかの街に寄って、大陸の時事についての話を聞いていくついでに黄巾党などの賊の退治を行い、路銀を稼ぎながら旅を続けていた

「それにしても・・・あの噂って本当なのかな？」

「私には確かめる術がないから確かなことは言えないけど・・・なんとなく事実って気がするな」

あの噂とは天の御遣いが現れるという話だ

占い師である管輅の予言であり噂によると、“流星に乗ってやってくる天の御遣いが大陸に平和をもたらす”といったものである

「それも勘？」

「まあ、占い師の予言つてのも不思議な気がして、ね」

「？国の未来を占った結果、出てきたってことじゃないの？」

「私の中でも明確な答えがでているわけじゃないから・・・なんとも言えないかな」

法正の勘が何かを感じているようだ

ならば忘れずに心の内に残しておこうと、姜維は考えていた

「・・・さて、久しぶりね・・・このあたりも」

急に法正が立ち止まりあたりを見渡す

特に何かあるわけじゃないが、懐かしさに目を細めている
その声からは喜びが感じられた

「もうすぐ目的地だよ」

「そつか・・・楽しみだな、お姉ちゃんの故郷」

「そうね・・・たくさんの桃の木があつて、とっても綺麗な桃の花
を咲かせるの」

「桃の花？」

「ええ・・・一面中に桃の花が咲いていて、まるで桃源郷みたいな
の」

雲ひとつない空を見上げながら法正は嬉しそうに語る

十二年ぶりの帰郷だ、当然と言えば当然だ

姉の様子に姜維も期待が高まる

自分の故郷は分らないので、姉の故郷は自分にとっても故郷となる
場所だ

自然と笑みがこぼれる

「お姉ちゃん、早く行こうよ!!」

「ふふ、そうね」

姜維が法正の腕を引っ張りながら急かす

はしゃいでいる妹に引っ張られながら法正も足を動かした

楼桑村

「なっ!・・・これは」

「・・・賊の襲撃にあつたみたいだね」

法正の故郷にたどり着いた二人はその光景に目を疑った

特に法正は手を、血が出るほどに握りしめていた
家はところどころ壊れ、道端には血の痕が残っていた

「お姉ちゃん、村の人を探してみよ？襲撃があつてからまだそんなに時間も経つてないみたいだし。それなのに賊がないのはおかしいから・・・村の人たちが撃退したのかもしれないよ？」

それは希望的観測にすぎない

おそらく村を襲つたのは黄巾党であろう

黄巾党には国でさえ手を焼いているのだ、こんな田舎の村が撃退出来るはずがない

官軍が来たのなら話は違ってくるが、それこそこんな田舎を救えるほどの余裕は今の官軍にはないだろう

「お姉ちゃん！！」

「・・・そうだね、生き残っている人を探そつか」

それでもわずかに生き残りがいる可能性を考え、村の中に入っていく不確かな足取りは現実を受け入れるのを否定しているかのようだ

姜維は今こそ自分が姉を支えなきゃ、と視線を巡らせる

村人が少しでも生き残っていれば姉も自分を取り戻してくれるだろうと

村に入っていくといくつもの声や足音が聞こえた

その音に姜維は笑顔を、法正はこわばった顔をした

普段の法正なら経験と勘から賊ではないということがわかったであろう

だが今の彼女は思考が完全に麻痺していた

だからこそ気付かない

その声は、その足音は村を直そうと動きまわる村人たちの発している音だということに

姜維はもちろん声から村人たちの大半が無事であることに気付いた

だからこそ法正の腕を引つ張る

「あつちに人がいるみたいだよ？行ってみよ？」

「・・・うん」

姜維の言葉に法正はいつでも剣を抜けるように左手で鞘を抑えながら音のした方向へ進む

黄色が見えた瞬間に切りかけられるように

だが、実際に見たものは人々の笑顔だった

もちろん黄色い頭巾は身につけていない

「ほら、村人たちは無事だよ！お姉ちゃん」

「・・・よかった・・・本当によかった」

村人たちの姿を見て力と緊張が一気に抜けたのだろう

法正はその場に座り込んでしまった

安心したためか目に涙も溜まっている

そんな姉の様子に姜維はホッと胸をなでおろす

「おや？旅人ですか？」

「あつ、はいそうです」

安心していた二人に村人が声をかけた

法正はうつむいていたので姜維が答える

声をかけてきた人は30代半ばほど女性だった

「ようこそ、楼桑村へ！まあ、今はこんなですけどゆっくりしていただくさい」

「ありがとうございます。何か手伝いましょうか？」

女性は笑顔を浮かべながら歓迎の言葉をかける

姜維は自分も復興の手伝いをしようと申し出るが

「いえいえ、お連れの方もお疲れのようですし・・・もつすぐです

から」

「そうですか・・・何かお手伝いできることがありましたらまた言ってください」

法正は女性の声に懐かしさを感じ、顔を上げた
こつちを見ていたのであろう、女性と目があつた
三十代ぐらいにみえる桃色の髪的女性だ

「もしかしてあなた・・・月歌ちゃん？」

「やっぱり・・・お久しぶりです、桃子さん・・・お元気そうですね
によりです」

女性は法正の知り合いだったようだ

「立派になったね・・・十年ぶりくらいだったっけ？」

「だいたい十二年ぶりですね。それで、この村に何があつたんですか？」

再会の挨拶を済ませた後、この村の現状について尋ねた

「それがね、五日ほど前に黄巾党に襲われたんだけど・・・帰ってきた桃香の連れの方たちに助けられたんだよ」

「桃香はどこかに出かけていたんですか？」

「噂の御遣い様を探しに出かけたのよ、大陸に渦巻く悲しみをなくしたいって」

「天の御遣い・・・ですか」

「そうよ・・・流星は遠い場所に落ちたらしくてね、いったん戻ってきてたの」

「そっか・・・あの子らしいな」

法正は幼馴染の変わらない様子に微笑む

「それで、あの子と同じ志を持った女の子たちと出会ったらしくて・・・」

「では桃香は・・・」

「ええ・・・旅に出るって、その子達と・・・力のない人々を守るんだって」

「そっか・・・ともかく村が無事でよかったです」

「それで・・・桜華さんは？」

「師匠は・・・旅先で死にました」

法正は辛そうに言った

自分を導いてくれた存在の死を

「そう、それは辛かったわね・・・それで、その子は？」

彼女は姜維を見ながら尋ねた

「この子は姜維。私の妹です」

「はじめまして、姜維です。お姉ちゃんとは血はつながってませんが・・・私の家族です」

そう言って頭を下げた

「桜、こちらは劉安さん。私が子供のころにお世話になった人よ」
法正は姜維にも紹介した

「月歌ちゃんの妹だったの・・・私のことは桃子でいいわ、姜維ちゃん」

「私のことは桜でいいですよ」

二人は笑顔を見せる

「それじゃあ私たちは桃園に行ってきます。師匠の・・・お墓を建てなければならぬので。また戻ってきますのでお話はその時に」

「わかったわ・・・手伝いはいる？」

「いいえ・・・大丈夫です」

そう言って法正たちは村の奥へ歩き出した

「そういえば・・・桃香たちが桃園に行ってるって言つのを忘れてたわ」

劉安はそうつぶやいた

こうして少女たちは再会する

志を同じくする同志を連れて

そして物語は動き始める・・・

第七話 帰郷、集う星の輝き（後書き）

劉備の母の名前は適当です

ちゃんとした名前を知っている方がいましたら教えてください

次話はいよいよ幼馴染との再会です

第八話 誓いと再会と旅立ちと（前書き）

少し遅くなってしまいました・・・

書いているうちに長くなり、区切るのも面倒だったのでそのまま書き続けてました

拙い文章ですが楽しんでいただけたら幸いです

至らないところだらけですが「こつたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第八話 誓いと再会と旅立ちと

桃園

「よかった・・・ここは被害を受けてないんだ」

「・・・すごい」

一面に咲き乱れる桃の花

幻想的な世界の中に二人はいた

一人は懐かしさに、もう一人はその幻想的な世界に、心を奪われていた

人が夢に描く理想郷の一つがそこにはあった

「・・・さて、あのへんだったかな」

法正は一本の桃の木の前へ向かう

その木はまだ少女だった自分と師が出会った場所

自分の村のなかしか知らず、幼馴染とともに駆け回っていた彼女が世界を知った場所

どんなに時間が経とうと、今の彼女が始まった場所を忘れることはない

迷うことなくその木の元へたどり着く

「・・・その木が？」

「ええ・・・ここで私はあの人と出会ったの」

姜維は以前から聞いていた

一本の桃の木が、法正が旅に出ることにつながったのだと

「ここで私は出会ったの・・・幼馴染とかくれんぼをしているときに・・・師匠つてはこの木の上で寝てたのよ？それで私がこの木に登ろうとしたときに落ちてきたの」

彼女は笑いながら語る

姜維が今までに見たことのない表情で

そんな様子を少し羨ましく感じながらも、少女も微笑んだ

「・・・さあ、お墓を造りましょ」

「うん！」

姜維は少し大きな石を取りだした

それをわきに置き、桃の木の根元を少し掘る

握りこぶし二つ分ほどの大きさになった穴の中に、法正は包みに包まれた師の遺骨を置く

「師匠・・・あなたの愛した桃園です。私は・・・私たちはこれからまた旅に出ます。今度の旅はあなたとの旅よりも辛く、険しいものになるでしょう。だから・・・だからどうか・・・この場所から・・・私が始まったこの場所から私たちを見守っていてください」

「・・・これからは私がお姉ちゃんを支えます。だから・・・ゆっくり休みながら見守っていてください」

二人は手を合わせて拝みながら、師に言葉をかけた

その後、ゆつくり土をかぶせてゆく

少し窪んだ状態にし、先程取り出した石を置く

その回りを固めるように土をかぶせる

最後にお酒の入った盃を置いた

もう一度拝み、木を見上げる

あの日を思い返すように目を細めながら

「私は、ここに誓う。この国に笑顔を取り戻すことを。この国に流れる悲しみの涙を枯らすことを。この命果てるまで、平和のために戦い続けることを」

剣を抜き、天に掲げながら誓いの言葉を口にする

その後ろ姿に、姜維は憧れを抱く

（知らない人のために戦う覚悟はまだないけど、この人の背中が私を守る）

少女もまた誓った、姉とともに戦い続けることを

そんな神聖な誓いの場に、ポキッと枝を踏む音が聞こえた
二人は誰か来たのだろうと振り返る

そこには三人の女性が、少し気まずそうに立っていた

「・・・すまない。そんなつもりはなかったが、あなたの誓いを立ち聞きしてしまった」

綺麗な黒い髪をまとめ、横に流している女性が口を開いた

「そつそうなのだ！わざとじゃないのだ」

赤い髪を短くそろえている少女が頷きながら続ける

「かまいませんよ？誰かに聞かれて困るものではありませんし・・・
ここは私だけの場所ではありませんから」

法正はそう言って笑いかける
姜維も黙ってうなずいていた

「ありがとう・・・しかし立派な誓いだな。 私たちも先程姉妹の契りを結んだところなんだ」

「それは素敵ですね・・・桜、私たちもやりますか？」

「・・・すでに姉妹の盃を交わしたじゃないですか」

そんなやりとりをしている法正たちに、いや、法正に声がかかった

「もしかして・・・月歌ちゃん、なの？」

桃色の髪を腰のあたりまで伸ばした、少女の面影を残す女性が法正たちの前に出る

潤んだ眼を、どこか不安げに揺らす女性に、法正は見覚えがあったいや、忘れるわけない・・・幼馴染を忘れるはずがない

「・・・桃香、久しぶりだね・・・元気だった？」

そう言つて笑いかけた法正の目もまた潤んでいた

「うん・・・本物だよ・・・ね？」

「・・・私が違う誰かに見える？」

「ううん・・・見えないよ・・・月歌ちゃんにしか見えないよっ！
！」

彼女は涙を流しながら法正に抱きつく

法正もまた涙を流しながら彼女を抱きしめる

再会した幼馴染を桃の花が優しく見守っていた

（数分後）

「本当に久しぶりだね、月歌ちゃん」

「そうだね・・・だいたい十年以上は外にいたからね」

二人は他の者たちから少し離れ、桃の木に寄りかかりながら話す

今まで互いに何があったのか、今何を考えているのか、これからどうするのか

そんな話をしていた

「そっか・・・先生も死んじゃったんだ」

法正が師の話をする、彼女は沈んだ表情を見せる

彼女にとつても世界の話をしてくれた“あの人”は先生のような存在なのだ

「うん・・・あそこにお墓を造ったから、一緒に報告しよう？無事に

再会できましたって」

「そうだね」

二人は先ほど建てたばかりの墓の前で手を合わせる風が吹いた・・・二人の再会を祝うように桃の花びらが二人の周りを舞う

そんな幻想的な光景の中で、二人は師の声を聞いたような気がした
“これからは共に行きなさい・・・力なき人々を守るために”
そう言われた気がした

二人は顔を見合わせると笑った、大きな声で笑った

「そうか・・・世界を旅してきたのか」

「すごいのだ！」

少し離れたところで姜維たちもまた、今までの事について話していた
一通り話を終えた時、離れていた二人の方から笑い声が聞こえてきた
三人がその方向を見ると、離れていた二人がこちらに向かってきていた

「桃香様、お話はもうよろしいので？」

「うん・・・これから一緒に行こうって話になったんだけど・・・二人ともいい？」

「私も先程の誓いを耳にしました・・・彼女とはいい仲間になれるでしょう」

「あのお姉ちゃんたち強そうなのだ！一緒に来てくれるのならすごく頼りになりそうなのだ！」

「そうだな・・・一度手合わせ願いたい」

「鈴々もやりたいのだ！」

「しょうがないな、もう」

もう一方では

「あの子たちと行くことになったよ・・・嫌だった？」

「そうじゃなくて・・・なんかさつきからあの二人が怖い目でお姉ちゃんのこと見てたから・・・なんか嫌な予感が・・・」

「月歌ちゃん！まだ紹介してなかったよね？こちらは」

「関羽雲長です。桃香さまの幼馴染だったのだな。よく話は聞いている」

「鈴々は張飛なのだ！桃香お姉ちゃんがよく言っていたのだ」

「そんでもって、私が劉備だよ。よろしくね？」

三人が法正たちのもとへやってきて、自己紹介をした

「法正です・・・そうですね、月歌と呼んでください」

「姜伯約です。呼ぶときは桜でかまいません」

「真名をもらってしまっているのか？」

「かまわないよ？これから共に戦う仲間なんだから」

「そうか・・・私は愛紗だ。共に乱世を鎮めよう」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！これからよろしくなのだ」

「桜ちゃん、ね。私は桃香、よろしくね？」

互いの信頼の証に真名を交換した

同じ目的を持った同志として

「それで、月歌はどれほど強いのだ？」

「鈴々も気になっていたのだ！とっても強そうだから鈴々と勝負するのだ！！」

関羽と張飛が尋ねる

張飛はむしろ勝負を挑んでいた

法正は苦笑いを浮かべ、姜維を自分の前に差し出す

「私よりもまずこの子と戦ってみてほしいのだけど。いいかな？」

「ちよっ！聞いてないよー！！」

「むうー！鈴々は月歌と戦ってみたいのだー！！」

「桜に勝ったら私が相手をするから、ね？」

「・・・わかったのだ。約束だからね！」

そう言って張飛は武器をかまえる

姜維は完全に無視された形になった

当然面白くない

「桜、あなたは今まで私としか一騎打ちで戦ったことがないのだから一度試してみて？あなたがどのくらい強くなったのか自分で確かめてきなさい」

「お姉ちゃん・・・分かった。やってみるよ」

納得のいかないという顔をしていた姜維を法正は説得した

今まで姜維の相手は法正のみだったのだ

当然まだ姜維のかなう相手ではない

だからこそ自分の力がどの程度なのか知らない

張飛の強さは分からないが、自分の師にはおよばないということは感じていた

だからこそ、戦ってみようと思った

現在の自分がどれだけ姉の力になれるのかを

「いいのか？鈴々は私と同じくらい強いぞ？桜が相手になるのか・・・」

「私の弟子はそこまで弱くないよ。いい勝負になると思うから」

「妹なのではないのか？」

「妹でもあり、弟子でもあるの。私と一緒に旅をしてきたんだから・

・油断してると簡単に負けるよ？」

自信の表れなのか、法正は笑顔で言い放つ

関羽には信じられなかった

年は姜維のほうが上かもしれないが、張飛は自身と同じほど強いのだ

姜維もなかなか強そうではあるが、張飛ほどには見えない

関羽は張飛の勝利を信じて疑わなかった

「それじゃ、審判は私がするね？二人とも準備はいい？」

「大丈夫なのだ！」

「問題ありません」

劉備は審判をかってでて、二人に尋ねる

二人の声を聞いて、手を挙げた

その手を振りおろしながら言う

「はじめっ！！」

劉備の声が聞こえるや、姜維の姿がその場から消える

いや、劉備には消えたように見えたが、法正たちは違った

「！！速い・・・」

「早速本気でいくみたいね」

姜維は剣を抜き、張飛の首元へ向けて振る

張飛は慌てて自分の武器で剣をはじく

はじかれたと同時に姜維は元の位置に戻る

「本気出さないと私には勝てないよ？」

姜維は挑発をするかのように言い放つ

たった一合切りあっただけで分かった、張飛は自分と同程度の實力だと

だからこそ思う、お互いに全力で戦ってみたいと

己の持てる全てを出して向かい合いたいと

「凄いのだ！こんなにわくわくする相手は愛紗いらいなのだ！！」

張飛も感じ取っていた

自分の本気を出せる相手であり、本気を出しても勝てるかどうかわからない相手であるということが

自然と笑みが浮かぶ

それは先ほどまでの無邪気な子供のそれと違い、どこか大人びたも

のだった

「さっきはわかったのだ・・・鈴々も本気でいくのだ!!」

「うん、それじゃあ・・・いざ、尋常に」

「勝負なのだ!!」

瞬間、姜維が動く

先程以上の速さで張飛に切りかかる

張飛はその斬撃を体を横にずらしてかわし、己の得物である槍を一閃する

その一撃をしゃがんでかわし、距離をとる

相手の本気をはかるための行動だったようだ

今度は張飛が仕掛ける

槍を振り上げ、そのまま振りおろす

武器の長さが違うため、この攻撃は姜維の間合いの外からだったそれを剣で受け流し、一步前にでる

もどす槍が下から襲いかかるが、今度は剣で受け止め、刃を滑らして張飛に迫る

張飛は槍にこめた力を抜き、姜維の力を利用して一回転する遠心力のこもった一撃に、剣で受けた姜維は吹き飛ぶ少し離れた位置になんなく着地し、剣を正面にかまえる

二人の顔には緊張と嬉しさが浮かんでいた己の武を競い合わせるのが楽しいのだろう

その様子に自分の血が騒ぐのを関羽は感じていた

「今の一撃を受け止めるなんてすごいのだ」

「さすがに少し腕がしびれたよ・・・凄い力だね」

「桜の速さも凄いのだ!少しも目を離せないのだ!!」

二人は互いを褒める

(さっきみたいな一撃を何回も受けるわけにはいかない・・・だから

ら)

(少しでも気を抜いたら負けちゃうのだ・・・だから)

「次で・・・決める!!!」

二人の言葉がかぶる

二人とも勝負に出るようだ

姜維は剣を鞘に戻した

その様子に張飛と関羽は首を傾げる

法正は何も言わずに二人の様子を見つめるだけだ

最初は戸惑った張飛も、必殺の一撃を繰り出してくるのだろっと思
い、改めてかまえる

そのまま二人の動きが、いや周辺の空間まで止まる

勝負は次で決まる、誰もがそう思い手に汗握る

劉備がゴクリと唾を飲む

その音に二人が動き出す

「うおおー!!!!!!」

張飛が槍をしならせながら横向きに薙ぐ

先程の一撃よりも速く、唸りをあげる一撃が姜維に迫る

その光景を眺めながら姜維も叫ぶ

「はあああー!!!!!!」

張飛の一撃を膝を曲げ、駆け抜けることでかわす

その勢いを殺すことなく、鞘から抜き放つ剣に乗せて一閃

張飛の首の横でその一撃を止めた

あまりの速さに劉備の目にはいつの間にか剣が張飛の首元に向けら
れているように見えた

「・・・しょっ勝負あり!」

呆けていた劉備が自分の役割を思い出し、勝負の終わりを告げる

「んにゃー、負けたのだ」

「紙一重だったよ?」

二人は笑顔で武器を下げる

「・・・最後の一撃・・・あの速さは・・・」

「あれは居合と違って、剣の刃を鞘に走らせることで速さと威力を高める技だよ」

「鞘を・・・走らせる?」

「そう・・・その技を使いやすいように、私たちの振るう剣は片刃なの。東洋では刀とよばれていたよ」

そう言いながら姜維の持つ剣を指さす

「あれほどまでの一撃になるとは・・・」

「確かに速い・・・でもね、防がれたら終わりなの」

「・・・なるほど、無防備になってしまうのだな」

「そう・・・先の先をとる技だからこそ、防がれたらおわりって技」
法正は楽しそうに喋っている二人に歩み寄る

「桜・・・最後の一撃、見事だったよ」

「・・・あ、ありがとう、お姉ちゃん」

「凄い一撃だったのだ!まったく身動きできなかったのだ!」

「そうだよね、私にはまったく見えなかったよ」

劉備もやってきた

「ああ・・・本当に見事だった。弟子がここまで強いのだ、月歌はもつと強いのだろうか?」

「ふふ・・・さあ、案外桜より弱いかもしれないよ?」

法正は笑いながらごまかす

この流れは自分も戦うことになりそうだと感じたのだろう

「お姉ちゃんは強いよ？私よりもずっと」

姜維は胸を張って自慢げに言い放つ

姉を自慢する妹に皆が微笑ましい気持ちになった

「ふふ・・・勝負もいいけど、これからどうするか考えなきゃ」

法正は場の空気にさからって話を逸らす

若干不満そうにしながらも、関羽も頷く

「うーん・・・どうしよつか？」

劉備は何も考えていなかったようだ

頭をかきながら、法正に視線を向ける

劉備だけでなく、全員の視線が集まったのを感じ、法正は溜息をつく

「・・・とりあえず、近くの偉い人に将として雇って貰って名を挙げ
るべきじゃないかな？」

「そうだな・・・この近くだと、公孫？殿だな」

「そういえば、白蓮ちゃんが太守様をするって言ってたな」

「桃香・・・そういうことはすぐに言いなさいよ・・・」

法正は溜息をつく

こんなことでこの先は大丈夫なのだろうか

「うー、だって忘れてたんだもん・・・」

「しっかりしてよね？あなたは私たちを引っ張っていかなくやいないんだから」

「えっ？月歌ちゃんが引っ張ってってくれるんじゃないの？」

「何を言っているの？今の時代、人々を救うには国を興すのが一番
簡単なんだよ？国を興すなら私よりも中山靖王・劉勝の末裔である
桃香の方が大義名分があるんだから」

法正は劉備の持つ剣に目を向けながら言った

その剣の銘は靖王伝家、劉勝の末裔たる証だった

「でも・・・私よりも月歌ちゃんのほうが・・・」

「・・・桃香、あなたは私よりも人を惹きつけるの。あなたより優秀な人なら大陸に沢山いる。でもね？あなた以上に人を惹きつけるような存在はいなかった・・・私がこの国で出会ったなかでは、ね」「人を・・・惹きつける？」

「そう・・・ほら、後ろを見てみなさい。あなたに惹かれたんでしょ？愛紗と鈴々は」

「・・・愛紗ちゃん・・・鈴々ちゃん・・・」

劉備は振りかえり、二人を見つめる

二人とも笑顔で頷く

「私たちは桃香様の理想に、またその人柄に惹かれたのです。自信をもってください」

「そうなのだ！桃香お姉ちゃんだから鈴々たちはついて行くって決めたのだ！！」

「二人とも・・・私でいいの？月歌ちゃんのほうが「桃香」・・・月歌ちゃん？」

「それ以上は二人に対する侮辱になっちゃうよ」

「でも・・・」

「大丈夫・・・私がずっと傍で支えるから・・・あなたが迷ったら私が導くから・・・あなたが道を間違えそうになったらはたいてでも止めるから。だから、自分を信じて？今は信じられないのなら私を信じて？」

「・・・うん、分かった・・・まだ自信はないけど、やれるところまでやってみるよ！」

決意の火を瞳に灯し、力強く宣言する

「それでは、公孫？殿のもとへ行きましょうか？」

姜維は尋ねるが、劉備がその前に村に戻りたいと言った

「お母さんに報告しなきゃ・・・旅に出るって」
「そうだね、この際今日は村で休もうか？」
「それがいいかもしれないな」
年長者三人で話し合う
年少者二人は黙って聞いていた

楼桑村

五人で劉備の家を尋ねた

「ただいまー、お母さんにちょっと話があるんだけど・・・」
「旅に出るのでしょうか？体に気をつけるんですよ？」
「なんでわかったの？」
「それでもあなたの母親ですよ？あなたの顔を見ればわかります」
劉安は笑いながら言った

「それに・・・月歌ちゃんが旅に出るって言い出した時も同じ顔をしてたからね」
法正の方を見ながら付け加える

「今日でるの？」
「ううん。今日は村で休んで、明日出発するの」
「それなら今晚はおいしいご飯を作らなきゃね」
「手伝いますよ」
「大丈夫だからあなたたちは休んでなさい」
法正が手伝いを申し出るが、あっさり断られた

「・・・どうしてこうなったの？」
晩御飯はいつの間にかにぎやかなものに変っていた

法正が帰ってきたことを聞きつけた村人が押し掛け、明日には劉備も一緒に旅に出るという話を聞いたためだ
乱世を治める旅に出る一行の無事を祈り、村をあげて騒いでいた
法正と劉備のもとには先程から村人が次々に訪れていた
ありがたいのだが疲れていた

「我慢してよ、みんな心配してくれてるんだから」

「そうなんだけどね」

疲れで俯く法正に姜維は注意を促す

一通りの村人と顔を合わせ、今は落ち着いていた

「みんな笑顔だね」

「そうだね・・・やっぱり人は強いな。どんなに辛くても笑えるんだから」

「ちゃんと守らないといけないね、お姉ちゃん」

人々の笑顔を見つめながらそんな会話をしていた

（早朝）

まだ日も昇り切っていない時間帯

村を出ようとする五人の影があった

法正たちだ

「それじゃあ、出発しようか」

「桃子さんに言っていていなくていいの？」

出立を促す劉備に法正が尋ねた

「顔を見ると心配になっちゃうし・・・お別れは昨日の夜に済ませたから」

「・・・そう、ならいいのだけど・・・向こうはそう思っていないみ

たいよ？」

村を振り返りながら法正は言った
村の中から出てくる影があった

「行つてきます」ぐらい言つてから出発しなさい、まったくこの
子たちは・・・」

「・・・お母さん」

劉安だ

劉備は困つたような顔をする

「辛くなつたらいつでも帰つてきなさい？いくらでもお尻を叩いて
あげるから」

そう言つて劉安は微笑む

「・・・うん・・・行つてきます、お母さん」

「いつてらっしゃい」

笑顔で見送られ、法正たちは旅立つ

乱世を治めるための長い旅に・・・

第八話 誓いと再会と旅立ちと（後書き）

ようやく劉備たちを出せた・・・

進行速度は遅いですが、長い目でお付き合いください

第九話 星空の誓い（前書き）

また遅くなりました

今回も長くなりまして、区切るのも嫌だと思ったのでそのまま投稿します

至らないところだらけですが「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきま
すので、誤字・脱字合わせて教えてください
感想も待つてます！！

第九話 星空の誓い

幽州某所

公孫？に会いに行く前に、五人は近くの街に寄った
法正が言い出した言葉が発端である

「このまま公孫？殿の元へいっても、自前の兵もなしじゃあ名をあげられないわね」

「じゃあ・・・どうするの？」

「桃香・・・少しは自分でも考えてよ・・・そうね、途中の街や村に寄って義勇兵を募るくらいしか方法はないかな」

「しかし・・・我々にはそれらを賄う余裕なんてないぞ？」

そう言つて、関羽は袋を見せる

中にはわずかばかりのお金が入っているのみだった

「・・・よくそれだけのお金で旅に出ようとしたね」

「さすがにこの量では・・・三人での旅なら、もって三日つてと」
「ろですね」

所持金の少なさに、法正と姜維は呆れる

この三人はいつたいどうするつもりだったのだろうか？

そんな疑問を想い浮かべた

「じ、じゃあ、月歌ちゃんはどうくらい持つてるの？」

劉備は慌てて話を逸らす

今の話しぶりからいって、それなりに持っているのだろうという期待も込めて

「はあ・・・私たちは最低でも二週間生活出来るだけのお金しか持

ってないよ」

「うん。ずっと旅をしてきたから・・・あまり荷物が多くなっても困るからね」

しょうがないなあ、とばかりに劉備の問いに答える

姜維は自身の荷物の中からお金の入った袋を取り出し、みなに見せながらしゃべる

「これだけでは・・・とてもではないが兵を賄えないぞ？」

「どうするのだ？」

少しか期待していたのだろう、関羽は少しがっかりした様子で問う
張飛はお気楽な様子だ

「だから・・・珍しい物を売ってお金にしようかなって」

法正にはちゃんと案があつたようだ

姜維から荷物を受け取り、ごそそと中身をあさる

「例えばこれとか」

取り出したのは不思議な形をしている物だった

劉備たちは初めて見るそれに興味を抱いた様子で眺める

法正は軽く説明する

「これはこの大陸のずっと西にある国で作られたもので、旅先で野営することになった時に便利な道具よ。すこしいじると・・・ほら、これはスプーンといって汁物をすくって飲むための物、これはナイフといって食べ物を切るための物よ。他にもいくつかの道具を合わせて、持ち運びし易くしたもののな」

その便利な様子に、あるいは形が変わる面白さに皆は感心したように頷く

「なるほど・・・西の国の物であるなら、多少高く売っても好事家

が喜んで買っただろうな」

「ええー！売っちゃうのか？鈴々も欲しいのだ！」

「これ、鈴々！我儘をいうでない！！」

張飛が駄々をこねるが、関羽の一括で収まった

おそらく劉備も欲しかったのだろう

顔が引きつっていた

「ふふ、それじゃあ、少し大きめの街にいたらこれらを売って資金を得ましょうか」

その様子を微笑ましく思いながら、法正がまとめた

「・・・ホントにこの人たちと一緒に大丈夫なの、お姉ちゃん？」

「大丈夫よ？きつと・・・変に気を張っているよりもいいと思わない？」

「でも・・・」

「それに・・・この先は動乱の時代が待っている。そんな時代になる前から気負ってちゃ、何も見えなくなる・・・彼女たちだって分かってるはず、自分たちの背負う“モノ”の大きさを、ね？」

いまだに何かを言い合っている様子の三人を見つめながら、姜維に言い聞かせる

「桜も肩の力を抜いてみて？今からそんなに力を入れていたら最後までもたないよ？」

「・・・そうだね。今から気負う必要はないんだよね」

笑顔を見せる姜維に法正は頷く

その笑顔は桃園以来の笑顔だった

「二人ともー！何してるのー？先に行っちゃうよー！！」

「今行くよー！！」

法正たちが話している間に、三人は前に進んでいたようだ

残された二人は慌てて後を追いかけた

そんなわけで、街に着いた五人は宿を取りに行く者、物売ってお金を得る者、公孫？についてやこの州についての話を聞きに行く者の三手に別れた

宿は関羽と張飛が取りに行くことになり、売りに行くのは姜維、話を聞きに行くのが法正と劉備になった

五人は日が暮れるころにこの場所（街の入り口）で会うことにした

法正たちは街を歩いている人に話を聞いて回った

劉備の人柄の良さと法正の丁寧な尋ね方に街の人もしろいろな話をする

十分な情報を手に入れた二人は集合場所に向かいながら話をする

「それにしても・・・公孫？殿の話をする人はみんな普通って言うてたね」

「うーん・・・白蓮ちゃんは優秀だったけどなあ、普通に」

「桃香も言ってるし・・・良くも悪くもなく普通ってこと？」

「ううん、白蓮ちゃんは何んでもできたよ？普通に」

「なるほど・・・器用貧乏ってことなんだ」

街の人々も皆笑顔で言っていたので、悪政を行っているというわけではないのだろう

そんな話をしながら、二人は集合場所に到着した
すでに皆集まっていた

「もうみんな来てたんだ。それで桜、どうだった？」

「うん、これだけのお金になったよ。これだけで大丈夫かな？」

そう言っ姜維はお金を見せる

かなりの量になったようで、いくつかの袋にわけていた

「・・・うん、これだけあれば二千人は雇えるね。武器や防具の分を見積もってみても十分と言えるよ」

そう言って姜維を撫でる

姜維は目を細めて喜びを表す

「そっちは？宿とれた？」

「ああ、とりあえず二部屋とっておいた」

「三人と二人で別れるのだ！」

「それで、街の人々の話はどうだったのだ？」

関羽が尋ねる

「白蓮ちゃんは普通にいい政をしてるみたいだよ」

「そうだね、みんな普通って言ってたね」

二人は街で聞いた公孫？の評判を口にした

劉備は笑顔だったが、法正は苦笑いといった様子だった

街中の人たちから普通と言われた公孫？に少し同情的な気持ちになつていた

「それじゃ、今日はもう休もう？」

「そうですね。では宿に向かいますよう」

劉備の発言に関羽が頷き、宿に向かう

宿で晩御飯を食べた一行は借りた部屋で休んだ

部屋割りは劉備・関羽・張飛と法正・姜維となった

劉備たちの部屋

「それにしても・・・月歌は頼りになりますね」

布団を敷きながら関羽が言った

張飛はすでに眠っていた

「そうだね・・・昔から月歌ちゃんは頼りになったよ。優しかったし・・・それに比べて私はだめだね・・・言ってることは大きくても、そこにたどり着くための道が分かってなくて・・・月歌ちゃんや愛紗ちゃんたちに頼りっぱなしで・・・情けないよね」

「桃香様、それはちが「違わないよ」っ！桃香様？」

「・・・ごめん」

劉備は部屋を飛び出した

関羽は引き留めようとするが、すり抜けていってしまった
すでに月が頂点に差し掛かるうとしていた

法正たちの部屋

「明日には公孫？殿に会うことになりそうだね」

「うん。どんな人なのか？普通って話だったけど」

二人は公孫？のことについて話し合っていた

今の国の官たちはろくな者がいないという話を以前聞いていたため
だった

「桃香の友人だって言ってたから・・・しっかりした人だと思うけどね」

「それは・・・確かにそうだね」

否定しようとしたが、これまでのことを思い返し、結局肯定してしまっ
姜維だった

「でも・・・芯のしっかりした人だと思うよ？」

「ふふっ・・・そんなことは桜に言われなくても知ってるよ。私が
旅に出るときに背中を押してくれたのも桃香だったし。最後は泣い
ちやっただけ」

優しい顔をして法正は言った

記憶の中の、旅立ちの日に想いを馳せているのだろう

そんな姉の姿に姜維も微笑む

そんな時だった、隣で大きな物音がしたのは

姜維は剣を手に部屋を飛び出した

「っ！愛紗さん、どうしましたか？」

「桜か！桃香様が部屋を飛び出していつてしまったのだ！」

「こんな時間に・・・すぐに探しに行きましょう！」

「ああ！」

二人は慌てて外に向かおうとする

そんな二人の前に法正が立った

「探しに行く前に何があったのか教えて欲しいのだけれど？」

「そんなことしている場合かつ！！何かあってからでは遅いのだぞ
！！」

落ち着いた様子の法正に関羽は声を荒げる

外は完全に暗くなっていて、危険なのだ

今は賊も大勢いる

関羽の心配ももつともである

「落ち着きなさい！桃香の行き先には心当たりがあります・・・

だいたいの予想はついていていけるけど何があったのか教えてください」

「・・・桃香様は私や月歌と比べて自分は何の役にもたっていない
と・・・そんな自分が情けないと言って部屋を飛び出して行ったの
だ」

「やっぱり・・・そういうところも変わってないんだから、あの子
は・・・二人は一応桃香が戻ってきたときの為に宿にいてください。
私が桃香を連れ戻します」

話を聞き、法正はやっぱりといった具合に頷き、二人に指示を出した

「だが！「あなたに桃香を諭せる？」っ！しかし、先程も言ったが何かあつてからでは「ここは街の中です。賊が襲つてきてもすぐにとこうなったりはしません。それに、桃香の居場所には心当たりがあると先程言いましたか？」っ！」

「・・・分かりました。月歌様にお任せします」
「桜っ！」

「愛紗さん・・・ここはお姉ちゃんに任せるべきです。今のあなたが行つても話がややこしくなるだけです」

姜維は敬語を使った法正に全て任せることにした
自分や関羽よりも古く、長い付き合いの法正なら任せて大丈夫だと思つたのだ

関羽は手を握りしめ、唇を噛んだ
そんな関羽に法正は彼女の頭をなでる

「・・・分かつた。桃香さまを・・・頼む！」

「ええ、任せてください・・・二人は桃香が戻つた時に優しく迎えてあげてください」

「ああ」

「お任せください」

絞り出すような関羽に法正は微笑みながら頷く
劉備の慕われている様子が嬉しいようだ

「では、行つてきます」

身を翻しながらそう言つて、法正は宿を出た
そうして暗闇の中へその身を投じた

劉備は法正の考えていた通りの場所にいた
そこは街の外れであり、昼間街を歩いていた時に見かけた大きな木

の生えている場所であつた

その木の根元に膝を抱えている劉備がいた

「……やっぱりここだった」

「……月歌ちゃん」

法正の声に劉備は顔を上げる

その顔は涙で濡れていた

普段の柔らかな雰囲気は姿を消し、代わりに悲しみや後悔といった負の雰囲気纏っていた

「みんな心配してるよ？」

「ごめん……今は一人にして」

「い・や・だ！！……一人で落ち込んでたって答えはでないよ？」
法正はおどけてみせる

しかし、劉備は動こうとしない
それどころか再び顔を俯かせてしまう

「お願いだから、一人にしてよ……このままだと私……月歌ちゃんにひどいこと言っちゃうよ」

「……ひどいことって？」

法正を傷つけないと言う劉備に法正は尋ねる

しばらくだまつている劉備に法正は優しく語りかける

「言えないよ……桃香には。人を傷つける言葉なんて……ましてや私には」

ゆっくりと劉備の隣に腰掛ける

劉備はその行動に身をすくませる、いたずらが見つかって怒られる子供のように

いや、全身が震えていて、まるで極寒の地に薄着でいるかのようであつた

「ねえ桃香？あの日の約束覚えてる？」

「・・・あの日？」

二人は子供のころ、多くの約束をしていた

どうでもいいものを挙げると“毎日一緒にお昼寝する”といったもののまで約束している

大事な約束だつていくつかしていた

法正が旅立つ時にした“また会おう”というのも大事な約束だ

だからこそ、あの日がいっつなのが分からない

劉備は顔を上げ、首を傾げた

首を上げた劉備に笑いかけ、法正は続ける

「『もしどちらかが落ち込んだり、悩んだりしたら、必ず見つけて一緒に考えよ？』そうしたらどんな問題もすぐに解決できるよ！』
つて、桃香が言っただよね？」

「あ・・・」

「思い出した？師匠が旅に出るつて言つた時、私もついて行くか迷つて・・・隠れて一人、泣きながらずーつと考えていた時、あなたが私を見つけ出して言っただよ？」

その後、劉備と離れたくないという法正を劉備が説得したのだ

『月歌ちゃんの世界を見てきて？先生と一緒になら大丈夫だつて思うから。それでいつか戻ってきた時に一緒に平和のために戦おう？世界を見てきた月歌ちゃんの知識・経験と、私の見ていくこの国の情報を合わせれば、争いのない時代を創れるよ！私たちなら絶対にできる。どんなことがあつたつて、私たちは親友なんだから。遠く離れたつて・・・ずっと・・・一緒だから・・・』と

最後には二人して泣いていた

それでも法正は決意できたのだ

「だから・・・私に教えて？あなたが何を考え、傷ついているのか

を」

優しく問いかける

「・・・私、何の役にもたつてないって気付いたの・・・志だけ大きくて・・・みんなに・・・月歌ちゃんに頼り切って・・・人々の笑顔のために動こうって決めてたのに・・・自分じゃなんにもできなくて・・・私・・・必要ないのになつて・・・考えちゃって・・・考え始めると止まらなくて・・・今まで見えていた目標まで・・・見えなくなつて」

劉備の独白が終わる

「・・・そっか。そんなに悩んでたんだ・・・気付かなくてごめんね」

「うつん・・・私が勝手に考えてたんだもん・・・月歌ちゃんが気にすることじゃないよ」

「それは違うよ・・・桃香は私が悩んでる時はいつもすぐそばにいてくれたから・・・私には出来ないことなんだよ」

「え？」

「桃香はときどき人の心がわかつてるんじゃないかって思わせるような言動をするときがあるんだよ？」

「そんなことないよ・・・わかんないことばかりで・・・こう言えばこの人にはいいのかなとか・・・こう動けばこの人の助けになれるのかなつて・・・いつも考えて動いて・・・それがたまたま合つてただだよ」

今までの劉備の行動を振り返りながら法正は言う
それは違つと否定されても微笑みを浮かべていた

「それがすごいんだよ・・・そこまで相手の気持ちになつて動けることが。私には絶対に真似できない・・・あなたができること・・・あなたにしかできないこと」

「私にしか・・・できない、こと？」

「そう・・・あなたがそうやって動いてきたから今の私がいて、愛紗や鈴々もあなたについて行くって思えたんだよ？」

「でも・・・」

「私にしかできないことがあるように、桃香にしかできないこともあるの。そうやって、人にはそれぞれできることでできないことがあり、それぞれにしかできない役割を持っているの」

「役割・・・」

「そう、役割。そしてあなたの役割は仲間たちの心を支える柱であること」

法正は子供を諭す親のように、劉備を諭す

あなたにはあなたの役割があるのよと

「そんなこと・・・私には無理だよ・・・できないよ」

「いいえ、あなたならできる・・・あなたは世界をまわっていた私の心の支えだったんだから」

「私が・・・月歌ちゃんの心を支えて？」

「ええ・・・桃香はきつとがんばってる・・・あの日の約束を守ろうとがんばってるはずだって。私もがんばらなきゃって」

法正はゆっくり、けど確かに劉備の心をほぐしてゆく

からまった心をほどけば、また彼女は明るく笑えるのだと言わんばかりに

「・・・どうすればいいのかな？」

「うん？」

「私は・・・これからどうすればいいのかな？」

劉備は法正に尋ねる

答えを求める子供のように

そんな彼女を抱き寄せて、法正は告げる

「答えは・・・もう出てるんでしょう？とつくの昔に・・・あなたの
中で」

「・・・うん。私はやっぱり戦うよ・・・みんなの笑顔のために・
・悲しい時代を終わらせるために」

「うん・・・私たちの柱になるんだから、もう揺らいだりしちゃだ
めだよ。柱が揺らいだら、私たちは崩れるしかないんだから」

法正の腕をほつきながら、瞳に再び炎を灯らせ、力強く宣言する
戦うことを、人々の笑顔を護ることを

そんな劉備に法正は目を細めながら告げる
今後の彼女たちの有り様を

「それじゃあ・・・一緒に誓お？この星空の下で・・・これからど
うあるのかを」

劉備に剣を渡しながら法正は言う
渡された剣を見て、劉備は驚く

「これって・・・」

「誓いには必要でしょ？私はもういくつもこの剣に誓ってきたよ」
それは劉備の剣である靖王伝家だった

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

二人は微笑み合つと、それぞれの愛剣を抜き、空に掲げる

「私はこの剣に誓う。もう二度と迷わないと。大望を実現させるそ
の日まで、けっして立ち止まらないことを、法考直と共に進み続け
ることを」

それは劉備の誓い

時には悩むことがあっても、けっして迷わず、その歩みを止めないと
みんなの心を支える柱になることを

なにながあつても揺るがず、みなを支えることを

「私はこの剣に誓う。最期まで劉玄德とともにあることを。その剣となり道を切り開くことを。その盾となり彼女を守り抜くことを」
それは法正の誓い

劉備と共にあり、共に戦うと
自分たちの進む道に立ちふさがるものを薙ぎ払うと
自分たちの敵から彼女を護ると

二人はそれぞれの誓いを胸に笑いあう
そんな二人を星空が優しく包みこんでいた

「そろそろ戻ろっか？みんな心配してるよ」
「うう・・・戻りづらいよ」

「大丈夫、私がちゃんと行って来たから・・・こんな夜中に飛び出したことを怒ってやってって」

「うう、月歌ちゃんのイジワル・・・」

涙目で法正を睨む

法正は微笑みながら言う

「一緒に謝ってあげるから・・・戻るよ？」

「ま、待って！まだ心の準備が「いいからいくよ」って、月歌ちゃん」
「ん」

劉備の手を握り、歩き出す

法正たちが宿に戻ると、宿の入口でみんなが待っていた
張飛まで、眠そうに目を擦りながら待っていた
そんな様子に劉備は逃げ出そうとする

しかし、法正に手を握られているため逃げ出すことができない

「ただいま、みんな」

必死でもがいているうちに入口にたどり着いてしまう

法正はみんなに笑顔で言っていた

「ほら・・・桃香も」

「ええーっと、みんな・・・ただいま・・・心配掛けてごめんなさい・・・」

法正に促され、劉備は頭を下げる

「いえ・・・無事ならそれでいいのです」

「そうなのだ！桃香お姉ちゃんが無事でよかったのだ！」

「ええ、安心しました」

三人は笑顔で答える

その様子に劉備は目を丸くする

「あれ？みんな・・・怒ってないの？」

劉備は尋ねるがみな怒ってないと言う

それを受け、劉備は法正の方を見る

「・・・てへ」

「ひどーい！！月歌ちゃん嘘ついたんだ！」

「いや、あの時の桃香ってばいじめたくなるような空気だしてたから」

「だからってひどいよ」

二人の言い合いに残りの三人は呆れる

「お姉ちゃん・・・自分で言ってたじゃない。優しく迎えてあげてって」

「そうだぞ・・・本当は言いたいがいろいろあるのだががまんしてるのに」

「とりあえず鈴々は眠いのだ」

関羽がなにやらぶつぶつ言っている

張飛はやっぱり眠そうだ

「まあ、そのことは置いておいて・・・まだみんなに言うことがあるんじゃないの、桃香？」

「あとで話を聞かせてもらうからね！」

「分かった分かった」

法正は適当に流した

劉備はそんな法正をジト目で睨んでいたが、効果がないと思い、みんなの方を真剣な顔で見つめる

「みんな、今回はごめんなさい・・・私、自覚が足りなかったんだ・・・みんなに支えられてるって・・・だから・・・これから私がみんなを支えるから・・・もう迷ったりしないから・・・何があっても立ち止まったりしないから・・・だから、これからも私についてきてください・・・私に力を・・・みんなの想いをかしてください」

法正は劉備が柱だと言った

だが、今まではみんなに支えられていたのだ

（だから今度は私がみんなを支えるんだ！）

そんな想いを抱いての言葉だった

「水臭いですよ。すでに我が槍はあなたに捧げると決めています」

「そうなのだ！鈴々もお姉ちゃんについて行くって自分で決めているのだ」

劉備の義姉妹である二人は何を今さらと言わんばかりに告げる

劉備は笑顔で二人を見やる
二人の顔は笑顔であった

「私はお姉ちゃんと一緒に進むって決めています。桃香さんの進む道がお姉ちゃんの進む道に重なるのなら、私もあなたと共にあります」

姜維は姉を引き合いに出したが、みな分かっていた
姜維もみなと共に行くということを

「みんな・・・ありがとう」

「お礼はいいですから、今日はもう休みましょう。明日は兵を雇うのです。眠そうな顔をしてはいけませんから」

「そうだね」

そう言って関羽は宿の中に入ることを促す

劉備は綺麗な笑顔で答えた

そうして五人が宿に入っていった

第九話 星空の誓い（後書き）

全然話が進まない・・・

でも、今回の話は外せないと思いながら書きました

そのうち各キャラの設定を載せますが、桃香（劉備）の言動について補足説明しておきます

この物語の劉備は幼少期になんでもできてしまう月歌（法正）を見てきたため、できないことがあったりするとすぐに落ち込んでしまいます

今回の話でその辺は治っていくと思いますが・・・

ようは何でもできる幼馴染にコンプレックスをもっていたということです

最後にまた感想をいただきありがとうございます、るかけん様
これを励みにがんばっていきますので応援よろしくお願いします

第十話 法正の實力 前編（前書き）

昨日は忙しくて更新できませんでした・・・
今回も長くなってしまうので、二つにわけることになりました
後編は明日の18時に載せる予定です

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第十話 法正の實力 前編

幽州右北平郡

劉備の逃走劇から一夜明け、一行は二千の兵と共に公孫？の元を尋ねた

「すみません、公孫？殿に劉備が尋ねて来たと伝えていただだけますか？」

街の外に兵たちを待機させ、主要の5人で城の前にいた法正が門番に伝言を頼むと、門番は快く引き受け、城内に入っていた

「中へお入りください」
しばらく待っていると、先程の門番が一行を城内に招き入れた

「桃香！久し振りだな！元気にしてたか？先生のところでは別れて以来何してたんだ？」

「白蓮ちゃん、久し振りだねー！」

二人は再会を喜び合い、別れた後のことを報告しあっていた

「相変わらずみたいだな、桃香は・・・なんか安心したよ」

「そうかな？でも、白蓮ちゃんも変わってないよ？」

「そうか？自分では分からないからな・・・それで、今日は何しに来たんだ？ただ会いに来ただけじゃないんだろ？」

近況報告をおえ、話が本題にうつる

公孫？はなにをしにきたのか分かっているよだが、あえて尋ねた

「うん、これまでみたいに少数で戦っていても埒が明かないって思

って・・・それで白蓮ちゃんが近くで太守様をやっていることを思い出して、白蓮ちゃんに協力しようって思って兵隊さんを連れて来たの」

「・・・今街の外にいるやつらは桃香の兵ってことでいいんだな？何人連れて来たんだ？」

「二千んだよ」

「結構な数だな・・・よく集めたな？」

「私一人の力じゃないよ。月歌ちゃんたちのおかげだから」

「それってよく桃香が話してくれた泣き虫の幼馴染のことか？」

「えっ！いや、あの・・・その」

公孫？の発言に、劉備は『しまった』という顔をする

そのままギギといった音を立てながら後ろを振り返る
法正が凄くいい笑顔をしていた

青筋を浮かべ、目が笑っていないという点を除けばだが

「どうかしたのか？そういえば後ろの奴らは誰なんだ？」

劉備の様子に公孫？は首を傾げながら、今さらだが劉備の後ろにいる面子のことを尋ねた

四人を代表して法正が前に進み出る

「はじめまして、公孫？殿。私は法正、桃香と志を同じくするものです」

「私は関羽、桃香様の義妹だ。こっちは同じく義妹の」

「張飛なのだ！」

「私は姜維、法正の義妹です」

法正の自己紹介に便乗して、皆が名乗った

「分かってると思うが・・・私が公孫？だ。桃香の仲間なら白蓮でいいよ」

「いいのですか？」

真名をゆるす公孫？に法正が尋ねる

「ああ、かたつくるしいのは苦手なんだ。敬称もいらないよ」

「では白蓮殿、私は愛紗だ」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！」

「私は桜です。よろしくお願いします、白蓮さん」

「私は月歌、先程お話にあがりました桃香の幼馴染です」

法正の言葉で、公孫？は劉備の様子が変である理由がわかった
ちよつと拙かったかなと頬をかいて苦笑いを浮かべる

「そうだったのか・・・あはは」

「あう・・・月歌ちゃん、これはね・・・その・・・」

「別にいいよ。私が泣き虫だったのは事実だし」

気まずそうな公孫？と、悪戯が見つかった子供のように慌てる劉備
に法正は告げた

「世界を見て回って・・・少しは強くなれたつもりだしね」

法正の笑顔に二人はホッと息をはいた

「それで・・・力を貸してくれるのはありがたいんだが、そっちの
四人は強いのか？」

「うん、強いよ。私よりもずっと」

「そうなのか？そんなに強そうには見えないが・・・」

劉備の言葉に首を傾げる公孫？

その話を誰かが盗み聞きしていることを法正は感じた

特に警戒するでもなく、注意を向けて、気付いているぞと訴えかけ
てみた

すると女性が一人、扉から中に入ってきた

「おや？伯珪殿には分からないのですか？この者たちの強さが」

「そういうお前にはわかるのか、子龍？」

公孫？の元へ歩み寄りながら話しかける女性
薄い青色の髪に切れ長の目を持つ、ちょっときわどい感じの服を着た女性であった

「当然であろう？これほどの者たちならば姿を見ただけでただものでないとわかる」

何を当り前のことをと言わんばかりの態度で女性は言い放つ

「・・・貴殿も相当の武をお持ちのようだな」

女性を油断なく見つめていた関羽がもらす

「！？分かるのか、そういうのって？」

「まあ、ある程度の武を納めれば・・・それで、彼女は？」

関羽の言葉に驚く公孫？に法正が頷きながら、新たに登場した人物のことを尋ねた

「ああそうだったな。こいつは趙雲、字は子龍。今は客将って形でうちにいるんだ」

「以後お見知りおきを」

公孫？の紹介に趙雲は頭を下げる

「そうですね・・・伯珪殿にも分かりやすく、私が彼女たちと手合わせるといふのはどうでしょう？」

「確かにそれはわかりやすいが・・・そっちはいいのか？」

趙雲の提案に公孫？はかまわないか尋ねた

「みんながそれでいいなら私はべつにかまわないよ」

「私はかまいません。むしろ戦ってみたい」

「鈴々もぜんぜんいいのだー！」

「私も大丈夫です」

劉備、関羽、張飛、姜維は肯定の返事をする
残りの法正に全員の視線が集まる

そんな様子に苦笑いしながら法正は答える

「ふう・・・この流れで断れるわけないよ。私もべつにいいよ」
法正はしょうがないとでも言うかのように肯定した

「それじゃあ・・・誰と戦ってもらおうか？」

「私が指名してもよろしいですか？」

相手を選ぼうとする公孫？に趙雲が尋ねる
その様子に法正は『まずい』という顔をする

「では・・・法正殿、お手合わせ願おう」

「はあ・・・やっぱり。一応理由を聞いてもいい？」

趙雲は法正を指名した

法正はやっぱりと言いながらも理由を尋ねる

「他の三人は私と同じくらいの強さだと分かるのだが・・・あなたの強さがわからなかったからだ。・・・先程も私に気付いていたようだったしな」

「・・・わかった。それじゃあ、外に出ましょうか」

趙雲の言葉に納得したのか、部屋を出る法正
そのあとに趙雲が続いた

「・・・なあ、月歌って強いのか？」

残りの面々も後を追いながら、公孫？は首を傾げていた
趙雲の言葉に疑問を抱き、四人に尋ねる

「それは・・・私にもよくわかりません」

「前に勝負を挑んだ時もはぐらかされたのだ！」
関羽と張飛はよくわからないと答えを返す
だが、劉備と姜維は笑顔でいた

「月歌ちゃんは強いよ？そうだよ、桜ちゃん」
劉備は姜維に尋ねた、いや確認した
その言葉に頷きながら姜維は告げる

「お姉ちゃんは強いですよ」
姜維は誇らしげだった

外に出た法正たちは白の庭の真ん中で対峙していた
劉備たちが到着し、公孫？自ら審判を買って出た
劉備たちは少し離れた場所で観戦することとなった

「それじゃあ二人とも、準備はいいか？」
「問題ない」

「いつでもいいよ」
公孫？の問い掛けに、二人は力を抜きながら答える

「それじゃあ、よー」公孫？様！！大変です！！」っ！何があった
！」

手合わせが始まる寸前で一人の兵が駆け込んできた
その様子に何があったのかを尋ねる公孫？
彼女の顔には太守としての責任を負う覚悟が浮かんでいた

「街の北に黄巾軍を確認いたしました！数はおよそ五千！まっすぐ
この街に向かっています」

「くっ！結構な数だな・・・」

今現在、公孫？の動かせる軍勢はおよそ三千といったところである
太守といえど今の時代ではなかなか兵を養っていけないのである

「白蓮ちゃん！私たちも手伝うよ！いいよね、みんな？」

「もちろんです」

「鈴々にお任せなのだー！」

「人々の笑顔を奪う黄巾党・・・許すわけにはいきません」

劉備の言葉に関羽たちが頷く

「ありがたい！それじゃあ、兵を街の北側に集めよう。街の中に入るわけにはいかないからな」

「うん、そうだね。それじゃあ私たちは一度兵隊さんたちの所に戻るね？」

そう言って走り出そうとするが、立ち止まりあたりを見回している
不審に思った公孫？たちを代表して、姜維が尋ねた

「桃香さん、どうかしました？」

「ええっと・・・月歌ちゃんと趙雲さんがいないな～って」

劉備の言葉に一同があたりを見回す

劉備の言う通り、二人の姿がなかった

「ああ、あの二人なら黄巾軍を確認したって聞いてすぐに飛び出して行ったよ？」

「ええー！！二人だけで行っちゃったの！？」

「まあ、趙雲さんが飛び出していったのを見た姉が止めるために追いかけたって感じでしょうけど」

姜維が付け加える

「そういうことは早く言え！桃香様、我々も急ぎましょう！」

「そうだね！ たった二人で五千人も相手にできるわけないもんね」

「では、私と鈴々、桜で二人の救援に向かいます！ 桃香様は兵を動かしておいてください。白蓮殿も兵をお願いします」

「わかった！ 三人とも気をつけてね？」

「無理せずに、二人を捕まえたら引き返せよ！」

走り出した三人に劉備と公孫？ が答える

黄巾党の軍勢はすぐそこまで迫っていた

第十話 法正の実力 前編 (後書き)

次回は法正が無双する予定です

キャラ紹介も併せて載せる予定ですので、そちらもよろしく願います

第十話 法正の實力 後編（前書き）

後編です

正直、一対多数の戦いの描写が難しい・・・
主人公の強さが伝わるか不安です・・・

「こうしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます！！

第十話 法正の實力 後編

趙雲は街の中を一人走っていた

胸に秘めるは黄巾党への怒り

法正との手合わせを邪魔されたことに対する怒りだ

（あれほどの強者との戦いを・・・さつさと片付け、もう一度手合わせ願うとしよう）

趙雲は聞いていなかった

黄巾党軍の数が五千であるということ

街の外に出、黄巾軍を目にした

（・・・そういえば数を聞いていなかったな・・・少し早まったか？）

五千の大軍を前に冷や汗を流し、そんなことを考えながらも表情にはまったく出さない

それどころか声高に啖呵をきった

「我こそはく常山の登り龍く趙子龍なり！我が槍の鎗となりたい者はかかってこい！！」

趙雲の無謀ともいえる、たった一人での戦が始まった

趙雲が戦闘を開始した頃、関羽たちも街の中で戦っていた

否、それは一方的すぎて戦いというには程遠かった

街の中でゴロツキが暴れようとしていたのだが、姜維を見つけ、三人で止めに入ったのだ

「ちきしょー！覚えてろよ！！」

「兄貴　！待ってくれー」

「待つて欲しいんだな！」

逃げ出すゴロツキの逃げ足の速さに三人は追いかけるのを諦めた
壊された建物の中にまだ人がいるという話を聞いたためでもあった

「こんなことをしている場合ではないのだが・・・」

「愛紗！ブツブツ言つてないで手を動かすのだ！！」

黄巾党の大軍が迫っている状況であつても目の前で困っている人々
を放っておくわけにもいかず、三人は足止めをくらっていた

しかし、焦っている様子の関羽と張飛とは対照的に姜維は落ち着い
て瓦礫を片付けていた

「二人とも少し落ち着いて？そんなんじゃないつまで経つても終わら
ないよ」

「どうしてお前はそうも落ち着いていられるのだ！お前の姉の危機
でもあるんだぞ！」

「そうなのだ！桜は月歌が心配じゃないのか？」

あまりにも落ち着いた様子の姜維に関羽が怒鳴った
張飛もその通りだと頷いている
だが、姜維は相変わらずであつた

「心配しなくても大丈夫ですよ？お姉ちゃんが自分から動いたんで
す。道に迷いでもない限り、趙雲さんもこの街も守ってくれます
よ」

自信満々に言いきる姜維に、一瞬言葉に詰まる関羽
しかし、相手は五千である

たった二人でどうにかなるとは思えない
少し冷静さを取り戻した関羽は姜維に訴えかける

「お前が月歌を信じていることはわかった・・・だが、相手は五千

なのだぞ？ たった二人で何とかできる数ではない！」

口にしながら、改めて危機感を募らせてしまい、再び声を荒げる関羽
姜維は溜息をつきながら答える

「だから大丈夫だってい「あつ！桜　！ここってどの辺？街の出口
ってどっちだっけ？」・・・すみません、大丈夫じゃないかもしれ
ません」

三人の会話に割り込んだのは、自分たちより先に城を飛び出し、今
まさに戦っていると思われる法正であつた
彼女の登場に姜維は滝のような汗をかき始めた
関羽と張飛は態度を一変させた姜維に気付かず、法正の登場にただ
驚いていた

「月歌？お前は先に城を出たのでは・・・」

「なんでここにいるのだ？」

二人の驚きと疑問はもつともである

その疑問も法正の答えで呆れに変わった

「いやー、街の外に向かう途中で近道しようって思ったら道に迷っ
ちゃって」

「・・・何をしてるんだお前は」

「月歌ってすごい馬鹿なのか？」

「お姉ちゃん、この道を真っ直ぐ行けば外に出られるから・・・早
く行かないと趙雲さんが危ないよ！」

そんな関羽たちを無視して、姜維は街の入り口を指さしながら叫ぶ
法正は頷くと、その場から消えた

いや、消えたように見えたのだ

先程関羽たちが追い払ったゴロツキの逃げ足以上の早さで走っていく
その様子を呆然と見送る関羽たちを姜維が急かす

「愛紗さん、鈴々！呆けてないで手伝ってください！私たちも早く行かなきゃ」

「・・・先程と言っていることが違うのか？」

「少し落ち着けて言ってたのだ」

関羽たちの立場が変わっていた

法正の登場に関羽と張飛は落ち着きを取り戻し、姜維は焦りを見せ始めた

「何言ってるんですか！お姉ちゃんがさっきまで道に迷っていたということは、趙雲さんは、今一人で戦っているってことなんですよ

！」

「っ！！」

「なっ！！」

姜維の言葉に二人は顔色を変えた

姜維の焦りの意味を正確に理解する

だが、一度冷静になっていたのでそれ以上は何も言わず、瓦礫の除去に力を入れる

三人は黙って作業を行っていた

（お姉ちゃん・・・間に合っていて！！）

姜維は姉の力を信じ、瓦礫の下の間隙にいた人を助けに行く作業が終わるのには、まだ時間がかかりそうだった

関羽たちが走り出した後、劉備もまた走っていた

公孫？は兵を招集するのに時間がかかるため、劉備たちの連れて来た兵たちを先に援軍に回すことになった

劉備たちは街の南側から来たため、兵たちも黄巾軍が来た方角とは逆の位置に兵たちを待機させていたのだ

（月歌ちゃん・・・どうか私たちが行くまで無事でいて！）

劉備は走る、何度も転びそうになりながらも
いや、すでに転んでいるのだろう

膝にはすりむいた痕があり、血が滲んでいる

劉備は痛み顔に顔をしかめながらも走った

自分の心を支えてくれた人を助けるために

ただ足を動かし続けていた

公孫？は城内の自室でイライラしていた

彼女は自分一人助けに行くのに加わっても足手まといになることは
分かっていた

だからこそ兵が集まるのを待っているのだ

だが、集まるのには時間がかかる

その間何もすることがなく、彼女は落ち着けないでいた

（全くあのバカは・・・自分の武を過信しすぎだ）

だが、そんな趙雲に幾度となく助けられたことも事実である
だからこそ、今度は自分が助けたかった

「死ぬなよ・・・子龍」

公孫？は窓の外を見つめながらそう呟いた

開戦からいったいどれほどの屍をきずいたのか
二十を超えたあたりから数えるのをやめたため、正確な数は分から
なかった

だが、目の前にいる敵の数は一向に減ったように見えなかった
終わりの見えない戦いに、趙雲の精神は蝕まれていく
体力の方もすでに限界が見えてきた

（いよいよ年貢の納め時か・・・伯珪殿のためにもなるべく多くの
敵を道連れにしようぞ！）

そんな心とは裏腹に、自信の攻撃からキレがなくなり、簡単に防が
れてしまうようになった

「ようやく疲れを見せたか！野郎ども！一気に決めちまうぞ！！」

「「「「「おおおーーーーー！！」「」「」」」」

敵兵の一人が声を張り上げた

それに呼応し、敵軍は雄たけびを上げながら襲いかかってくる

（っ！まずい！！これまでか！）

突撃してくる黄巾軍の先頭の男が武器を振るう

その一撃を避けようとし、死体に足を取られて動けなかった

（最後に・・・法正殿と武器を交えてみたかった・・・）

迫りくる刃に諦めにも似た笑みを浮かべ、目を閉じて自分を襲う兇
刃を受け入れる

キーンツ！と金属同士のぶつかり合う音が響く

どうしたのだろうかと目を開けた趙雲の目に映ったのは、一人の女
性の後ろ姿であった

「・・・ほうせい・・・どの？」

趙雲は一瞬、目の前の女性が誰かわからなかった

その後ろ姿は先程までの暖かな雰囲気を感じさせず、凜としたもの

だった

「ギリギリで間に合ったかな？」

振りむきながら笑顔で言う法正に、趙雲は頬笑みを浮かべながら言い放つ

「いえ、これから私の見せ場ですよ？」

「それじゃあ、私にも出番をわけてもらおうかな？」

ここが戦場であるということを全く感じさせない二人に、黄巾軍は手を出せないでいた

法正の放つ雰囲気完全に吞まれてしまったのだ
本能が感じてしまった、アレには勝てないと

「それじゃあ趙雲殿、舞台の幕を上げましょうか」

「私のことは星でかまわない」

「いいの？」

「法正殿は我が背中を預けるにたるお人だ。これは信頼の証でもあるのだ。受け取ってくれ」

「私も月歌でいいよ、星。あと言葉遣いも普段通りでね」

「了解した。では月歌、始めようか？」

「ええ、開幕ね」

黄巾軍が動かなかつたため、ゆっくりと会話することができた
おかげで趙雲の体力も少しであるが回復していた
そして始まる、戦というには程遠い、一方的な蹂躪が

趙雲はここが戦場であることも忘れ、ただ法正の戦いを見ていた
いや、戦いというには一方的であり、華麗であった
彼女の動きの一つ一つが舞の一部であるように、全ての動きが繋が
って見えた

敵の攻撃を全く受けることなくかわし、剣を振るえば敵が倒れていく

見事なまでに完成されたその動きは、一つの極みであった

「星？何してるの？あなたの見せ場、なくなるよ？」

「・・・そうであったな。ならば我が武をここに示そう！」

趙雲の参戦に黄巾軍はほぼ完全に浮足立った

法正一人でもまったく相手にならないのに、もう一人加わるのだ
先程まで自分たちが苦戦していた相手である

戦意はほとんど消えかけていた

かろうじて残っているのは相手がたった二人であるという事実のためだ

いくら強くてもいつかは疲れを見せるはず・・・

その考えが黄巾軍をこの場にとどめていた

法正の動きには全くと云っていいほど無駄がなかった

振るう剣は必ず相手に当たり、敵の攻撃は避けながらも別の敵を切りつける

趙雲の攻撃は手数と速さを前面に押し出したものであったが、だからこそ疲れるのだ

だが、法正は無駄な動きを一切省き、一撃一撃にもほとんど力を入れていない

それでも敵が倒れていくのは剣の質であろう
その剣を十二分に生かす腕が法正にはあった

「しかし・・・キリがないなあ」

また一人敵を斬りながら、法正はそう漏らす
敵兵の数は四千弱というところまで減った

それでもまだまだ敵はいる

「・・・しょうがない、か」

少し下がりがりながら呟き、右手に持っていた剣を左手に持ち替える

空いた右手で腰に下げていたもう一本の剣を抜き放つ
左手の剣とは対照的な、刀身の黒い片刃の剣であった

二刀を手に敵の軍勢に突撃する

黄巾軍も迎え討とうとするが、法正が速すぎた

そして、すれ違った時にはすでに胴体と首が離れている

腕を切り落とされた者や足を切り落とされた者もいる

黄巾軍は彼女が剣を振るっているようには見えなかったが、倒れて
いく仲間を目にし、騒然となった

騒がしさを増す戦場の中、ただ一つはつきりと言えるのは、彼女の
行く手を遮ることのできる者はこの場に存在していないということ
だった

「すごい・・・あれが月歌の実力なのか」

法正の突撃に、趙雲はまた動きを止める

趙雲には見えていた

法正の振るう剣が、黄巾軍の体を引き裂いてゆくのが

あまりの速さに、斬られたことに気付かない者もいるほどの速さ

その速さに強い羨望を抱く

どれほどの修練の先にあの境地はあるのだろうか

どれほどの修羅場をくぐればあの境地に至れるのだろうか

武の頂き・・・法正は確かにその場に立っているように感じられた

「私も・・・いつかその場所に・・・」

趙雲のつぶやきは戦場の喧騒に吞まれて消えた

だが、その想いは趙雲の心にしっかりと刻まれた

敵が攻撃を繰り出すよりも速く敵を切り裂き、敵軍を突破していく
法正

彼女の狙いはこの軍の指揮官だった

兵数は少ないとはいえ、太守のいる街を襲おうとした集団だ
率いる者がいるだろう

だからこそ、敵陣中央を派手に突破して見せ、敵軍の反応を待って
いるのだ

「自分たちで壁を作って囲めー！相手はたった一人だ！臆すること
はない！」

法正のいる位置からやや離れた場所から指揮官とおぼしき者の声が
した

彼女は進路をその声のした方向に変え、突き進む

黄巾軍の大半はすでに戦意を失っていた

法正が二刀になってからすでに千に近い味方がやられている

しかも相手はまったく疲れを見せない

そんな敵の前に立ちほだかろうとする勇気を彼らは持ち合わせてい
なかった

「まあ、農民出身ばかりじゃこのへんが限界か」

開かれた道の先に一人の男が見えた

恰好が他の者と違っている

指揮官とみてまず間違いないだろう

その男は焦っていた

「何をしている！はやく私をまも「おそい！」っ！」

男が叫ぶが、法正はすでに距離を詰めていた

そのまま首を刎ねる

静寂が訪れるが、一瞬だけであった

黄巾軍が悲鳴にいた叫びを上げながら逃げていく

法正は追わなかった

「・・・追撃はしなくていいのか？」

「あの数をたつた二人で追撃したところで意味ないでしょ？」

「そうだな、さすがに私も疲れた・・・」

「皆も来たみたいだし、少し休んだら？」

「もどつたら休むさ・・・それよりも手合わせの件だが・・・」

「休んでからにしない？」

「いや、今はいい・・・私がもっと力をつけたときに頼む」

趙雲は晴れやかな顔をしていた

上には上がいる、今まで旅をして学んだはずのことを思い出していた
上がいるのならそこを目指し、進んでいくだけだ

「・・・わかった、待ってるよ」

趙雲に笑いかけながら、法正は言った

「二人とも、無事か！」

「んにゃ？敵はどこなのだ？」

「よかった・・・間に合つたんだね、お姉ちゃん」

関羽たちが駆け付けた

すでに敵はいない

関羽と張飛は驚いていた

「月歌ちゃん！大丈夫？」

「子龍！無事だったか！？」

劉備たちも兵を引き連れてやってきた

「桃香ー！白蓮ー！私たちは無事よ？」

「月歌に助けられましたからな」

「なっ！じゃあ、ホントに二人だけで黄巾軍を倒したのか？」

公孫？は周りに横たわる死体を見渡しながら問いかけた

「指揮官倒したら逃げて行っただよ」

法正は何でもないことのように簡単に言っただけ

指揮官は普通なら敵陣の奥にいるものだ

それを倒したってことは、たった二人で五千の敵陣を突破したということだ

その言葉に驚く劉備、関羽、張飛、公孫？の四人

「お前・・・本当に強かったんだな」

公孫？は若干の呆れと苦笑いをまぜた顔で言う

他の三人も似たような表情だった

「これが私の実力だからね！」

法正は笑顔で言い放った

その笑顔につられて皆笑顔になった

この街は守られたのだ、たった二人の女性によって

第十話 法正の實力 後編（後書き）

初めて前後編にわけてみましたがいかがだったでしょう

主人公の強さをもっと上手く表現したかったのですが・・・

私ではこのあたりが限界です

限界を引き上げるため、皆さんのアドバイスをお待ちしております！

感想も出来れば送って欲しいです

人物紹介（前書き）

とりあえず主人公のみの紹介です

本編に出す予定のない設定や登場済みの設定しか載せません
ここまで本編をご覧になった方にはネタバレにはなりません

人物紹介

姓名：法正

容姿：薄い紫色の長い髪を腰まで伸ばし、一本にまとめている

瞳の色は淡い黄色をしている

顔立ちは整っていて、その笑顔は同姓でさえ見入ってしまう

性格：基本的に楽道家

先読みともいえる勘を持っているが、それに頼り切ったりせず、

自分の経験と知識から最善を導きだすことができる

人当たりはよく、誰にでも優しく接する

悩んでいる人や道を間違えてしまった人を諭したりもする

その際に使うのは彼女が西洋で学んだソクラテスの助産術（産婆術）で、

相手に疑問をかけ、答えを導く手助けをするという方法である

戦闘方法：二刀の剣を腰に下げているが、基本的に一本しか使わない

普段使うのは刀身の白い片刃の直刀である

ちなみにもう一本は刀身の黒い片刃の直刀である

高速で移動し、相手を切り裂く戦法を取る

その速さはある程度の武を納めていなければ見えないほどの速さである

幼少の頃、故郷に来ていた旅人を師と仰ぎ、幼馴染と別れ世界をめぐる旅に出た

おおよそ十年ほどで世界を一周して帰ってきた
旅先で姜維を義妹とし、師とは死に別れた

戻ってきたあとは、孫策たちと出会ったあと、故郷を目指した
故郷に師の墓を造っていたところで幼馴染である劉備と再会した
そして、劉備たちと一緒に人々を守るための戦に参加していくので
あった

実は泣き虫であった

人物紹介（後書き）

こんな感じでいいのでしょうか？

他にも知りたいことがありましたら教えてください
お答えしますので

第十一話 先を見据える瞳（前書き）

ごめんなさい・・・

現在進行形で体調を崩しています・・・

なので今回もまた短いし、あまり進んでいません

第十一話 先を見据える瞳

法正たち一行が公孫？の元を訪れてから約二カ月経った
その間にいくつもの黄巾党を潰してきた彼女たちの名は幽州内では
有名になりつつあった
そんな折に朝廷から使者がやってきた

城内

「そろそろ、かな」

法正は使者が帰っていくのを城壁の上から眺めていた
なにが“そろそろ”なのかはわからないが、何かを決めたようだ

「月歌、こんなところにいたのか。伯珪殿が呼んでいるぞ」

趙雲がやってきてそう言った

手合わせの約束はまだ果たされていない

ただ、趙雲はこの二カ月ほどの間、関羽や張飛、姜維とは何度も手
合わせをしていた

その中で真名の交換もしていた

その場に居合わせた劉備も便乗していたが

「わかった、すぐ行くよ」

そう言うとなら法正は梯子を使わずに、城壁から飛び降りた

平然と着地した法正に、呆れを見せる趙雲が呟く

「・・・そうやっていつも城を抜け出していたのか」

「みんなには内緒にしておいてね」

片目をつむって見せる法正に趙雲は自分もやってみようなどと考えて
いた

「みんな、お待たせ」

「お姉ちゃんどこに行っていたの？」

「後でね」

姜維の質問をはぐらかしつつ、公孫？に視線を向ける

「そろったか・・・まずは・・・急に呼びだしてすまなかったな」

「何かあったの、白蓮ちゃん？」

劉備の質問に公孫？が頷く

「先程皇帝からの使者が来て、黄巾党の殲滅という勅が言い渡された」

「・・・ようやくですか」

公孫？の言葉に関羽が反応した

他の皆も概ね似たような意見であろう

黄巾党が街や村を襲うようになってからすでに三カ月は経過している
今さらという考えが浮かぶのも当然である

「そこで・・・今後のお前たちのことだが・・・」

「そうですね、そろそろ私たちもここを出ようと思います」

「えっ！月歌ちゃんどうして？」

言いにくそうにしている公孫？に助け船をだすように発言した法正

それに劉備が疑問を投げかけた

関羽と張飛も首を傾げている

姜維は何かを考えているようだ

「いつまでも白蓮に迷惑をかけるわけにもいかないし・・・私たちも義勇軍という形の軍を持っているんだから、黄巾党の殲滅に参加

するのもありかなって」

この二カ月ほどの間でみんな（・・・）の名を広めることもできた
だからこそ、太守よりも目立ってしまう自分たちの存在は公孫？に
とって負の価値の方が大きくなってしまった
だからこそその法正の言葉だった

「そうだな・・・我々も有名になり、近頃は義勇軍に加わりたいたい
という者も増えて来た」

「そっか・・・そうだね。黄巾党は人々から笑顔を奪っているんだ
から倒さなくちゃね」

法正の話に關羽と劉備は納得した

張飛はよくわからないという顔をしていたが

「そうか・・・それなら餞別として武器と食糧を出そう」

「白蓮ちゃん・・・ありがとう」

「それじゃあ、早速準備にうつるね」

話がまとまったところで法正が退室していく
劉備たちもそれに続いた

「桜は行かないのか？」

「えっ！あ、はい。行きます」

思考にふける姜維に公孫？は声をかけた
我に返った姜維は部屋をあとにする
その様子に公孫？は首を傾げるのだった

（お姉ちゃんはこのに来た目的を、名をあげるためだって言ってた。
でも・・・）

部屋を出た姜維は法正の元へ向かっていた
自分の疑問に答えてもらうためだ

「お姉ちゃん、居る？」

「桜？どうかしたの？」

法正の部屋の前で呼び掛ける
はたして法正は部屋にいた
扉を開け、何事であるのかを尋ねる法正

「ちょっと聞きたいことがあって来たんだけど・・・今いい？」

「ええ、いいよ。中で話そうか」

そう言つて部屋の中に招き入れる
物がほとんどない殺風景な部屋だった
今までずっと旅をしてきたのだ、当然ではあつた

「それで？聞きたいことつて？」

「うん。お姉ちゃんはここを目指そうつて決めたとき、名を上げる
ためつて言つてたけど・・・お姉ちゃんの名は広まつてないよ？よ
かつたの？」

黄巾党を攻撃するとき、彼女は常に劉備の傍にいた

それはつまり前線から遠い場所にいたということである

法正の強さを知っている劉備たちは何故前にでないのかと聞いたが
『いざつて時のために私は後ろで待機しているから・・・後ろは心
配しないで前だけ気にしてて？』

と言つていた

一同は一応納得し、以後二カ月の間、法正が前にでることはなかつた
おかげで、前線の将を務める関羽たちは背後を気にせず戦うことが
できたが

前線で戦つていた関羽、張飛、姜維と、義勇軍を率いていることにな
っている劉備の名は確かに広まりつつあるが、劉備の傍でなにも
していなかつた法正は無名のままだ

「そのことか・・・これでいいの。もとより私の名を広めるつもり

はなかったから」

「どういうこと？」

目を閉じて言う法正に姜維はよくわからないと問いかけた

「黄巾の乱が終わっても、いえ違うね・・・黄巾の乱が終わった後から本当の乱世が始まるの」

「本当の・・・乱世」

「そう・・・それを迎えるまで、私は名をあげるつもりはない」

目を閉じている法正は、この先のことを見ていた（・・・）
しかし、それでも姜維の疑問は残る

「名をあげるのって、今じゃだめなの？」

「いいえ・・・今名をあげるべき者もいるわ。桃香や桜たちみたい
に、ね」

「それじゃあ・・・お姉ちゃんは？」

「私が桃香達と一緒にでなかったら名をあげていたわ」

「・・・」

「ふふ・・・まだ難しいかな？」

考える姜維に、法正は目を閉じたまま笑みを向ける

「・・・目立ちすぎないため？」

「正解・・・今の私たちはまだまだ弱い。今回みたいに誰かに頼ら
なくちゃいけないくらいに・・・そんな時期に名の通った将があま
りに多くいたらどうなると思う？」

「・・・強者に呑み込まれる」

「そう・・・領地も持っていない私たちはあまりに脆い。大きな勢
力に簡単に呑み込まれてしまう・・・滅ぼされてしまうことだって
考えられる」

姜維が答えにたどり着くと、法正はゆっくりと目を開けながら告げる
彼女の考えを

「それが桃香みたいな思想の持ち主ならまだいい……けど、今の時代を真に憂いている強者は少ない……弱者の想いを知らない者が多いからね。だからこそ……私が名をあげるのはもう少し先……領地を得て、今だっという時機を見極めてからね」

法正は姜維の頭を撫でながら語った

姜維は改めて姉の凄さを感じていた

自分たちは目先の黄巾党ばかりを見、その先をまったく見ていなかった

黄巾党を倒せば平和が訪れると思っていた

だが違うのだ

黄巾党はもとも食べ物に困った農民の集まりだからこそ、

黄巾党の乱を起こしたのは、権力を自分の欲望のためだけに使っていた者たちだと言ってもいいくらいだということに

その者たちをどうにかしないことには何も変わらないということに法正はしっかりと気付いていた

気付いて、それを行うための備えをしていた

「やっぱりお姉ちゃんは凄いな」

「そんなことないよ？こうして考えたのは皆がいるから……私一人でどうにかしなきゃいけない状況だったら、ここまで考えて動けなかったよ」

姜維の真っ直ぐな視線と言葉に法正は照れたように笑った

「さて……それじゃあ、疑問も解消できたようだし、桜も準備に入ちなさい」

「わかった。それじゃあ、また後で」

そう言っただけで姜維は部屋から出て行った

法正は頭を巡らす

この先何が起きても皆を守れるように
今自分たちに何が必要なのかを

そんな法正を月は優しく照らしていた

第十一話 先を見据える瞳（後書き）

だるい・・・

完全に風邪ですね

次話も今日中に載せたいのですが・・・
明日になるかもしれません

二日でティッシュ二箱開けるって・・・どうなんだろう

第十二話 時代を嘆く少女たち（前書き）

ようやく体調が戻ってきました・・・
遅れてしまって申し訳ないです

明日から大学も始まるので、目標であった一日一回更新も厳しくなりそうです

それでも三日に一回は更新していくつもりです
余裕がある場合はどんどん更新していきますのでこれからもよろしくお願いします

第十二話 時代を嘆く少女たち

（一週間後）

「それじゃあ、白蓮ちゃんまたね」

「お世話になりました・・・また、戦場ではない場所で会いましょう」

「いや、こちらも助かったよ・・・元気だな」

劉備たち一行は準備を終え、出立の時を迎えていた

関羽、張飛、姜維の三人は先に兵たちのところに行っている

この場には法正、劉備、公孫？の三人だけがいた

「しかし・・・子龍の奴はどこ行っただ、まったく」

「星ちゃんにも挨拶はしてあるから大丈夫だよ」

趙雲は見送りに来ていなかった

「それじゃ・・・なにかあったらまた頼ってきてくれ。多少は力になれるはずだ」

「ええ、頼らせてもらうよ」

「それじゃ・・・行こっか」

「そうだね、みんな待ってるだろうし」

「またな・・・桃香、月歌」

二人は歩き出した

そんな二人を公孫？は見送った

二人の背中が見えなくなるまで

「・・・行つてしまいましたな」

「ああ・・・って子龍？いつからここにいたんだ？」

「つい先ほです」

趙雲はしれつと答える

「・・・よかったのか？」

「ええ・・・彼女たちとはまた出会える・・・そんな気がしますから」

そう言った趙雲の横顔は少し淋しそうだった

～五日後～

「それで、これからどうするのだ？」

劉備率いる義勇軍は公孫？の元を離れた後、道なき道を歩いていた今現在の義勇軍の兵数は四千となっていて、なかなかの大所帯である

「そうだね・・・どうしょっか？」

「・・・兵の数は増えたけど、私たちはまだまだ弱小といっていい。領地も持っていないからお金や食料の問題もある」

人任せな劉備に呆れつつ、現状での問題をあげていく法正

「・・・改めて考えてみても問題だらけだね、私たちって」

「にゃー・・・ご飯がないと力がでないのだー」

姜維が苦笑気味にもらす

張飛は食料の部分にだけ反応していた

「そう、一番大事なのはそこ・・・なんだけど、実際それはお金があればなんとかできる。もともと義勇軍を名乗っているのだから、お金を支払う必要性はあまりない。どこかの街でまた珍しい物を売ればいい」

「まだあるのか？」

問題点の一つ一つに解決案を提示していく

関羽は最後の部分に反応を示す

以前売った品々を思い出したのだろう、劉備と張飛が目を輝かせて法正を見つめる

その様子に苦笑しながら、姜維は荷物を漁る

「今出さなくてもいいよ」

「ええー！見てみたいよ」

「ブーブー！」

法正に文句を言う二人だった

「というわけで、当面の問題は兵数と領地なんだけど・・・兵数は今の状況で増えても困るから置いといて・・・」

「領地、か。だがそれも難しいんじゃないか？」

「確かに・・・何か手柄を立てたわけでもなく領地を手に入れるのは・・・って、そうか！」

姜維は何かに気付いたようだ

「ふふ・・・桜の考えている通りよ。今の状況を有効に使うの」

「どういうことだ？」

「黄巾党の乱で手柄を立てるってこと・・・なんだよね？」

「ええ・・・ここで手柄を立てて、皇帝に領地を貰うの」

「だけど・・・私たちだけでできるのかな、それ」

劉備が不安を露わにする

それは当然だろう

黄巾軍の総数は自分たちの十倍以上なのだ

たった四千ぼっちで何ができるというのだろうか

「たしかに私たちは兵数で劣っている。だけど、将の優秀さは私たちの方が圧倒的に勝っている・・・だからこそ要所をおさえていくの」

「要所？どういうことだ？」

「黄巾軍の拠点みたいな場所のこと・・・黄巾軍は言ってしまうば賊と同じ。奪うことにはなれている・・・つまり攻撃にはなれている。その逆を守ることはなれていない」

今まで数の暴力で奪うことばかりをしてきた黄巾党だ

防御には不慣れであろう

法正はそこをつくと言っているのだ

「だが・・・敵の数が多くてはそう上手くはいかないぞ？」

「そこは策を上手く使うしかないね。ただ問題なのは、その策を練る軍師がいなくてことなんだけど・・・」

「月歌ちゃんはできないの？」

軍師の不在を問題にあげる法正に劉備は問いかける

これまでの方針を決めてきたのも法正であつた

そのまま法正が軍師として動けばいいのではという劉備の問いに、しかし法正は首を横に振る

「出来ないって訳ではないけど、私は軍略をきちんと学んだわけじゃないの。実践のなかで学んだ独学だから・・・ちゃんと学んできた人たちには劣る部分もあるの」

「・・・お姉ちゃんは将として、前線の指揮をしたほうがいいと私も思うな」

申し訳なさそうに言う法正に、姜維が自分の考えを付け足す

「確かにそうだな・・・現状では月歌の力が本当に必要なのは前線だ」

「それじゃあ・・・どうしよつか？」

「・・・桃香お姉ちゃんも考えるのだ」

お気楽な様子を見せる劉備に張飛が言い放った

「うゝ、ちゃんと考えてるよゝ！でも何も思い浮かばないんだもん」
「・・・この問題は考えて答えの出るようなものじゃない気がしま
すが」

姜維の冷静な突っ込みが入った

そう、軍師がいないというのを現状でどうにかすることはできない
一同が頭を抱える中、法正だけが地図を眺めて微笑んでいた

「ちゃんとこの問題への対処も考えてあるから」

「どうするの？」

「そうだね・・・このまま行けば見えてくると思っただけど・・・
あ、見えた見えた」

そういつて前方に見えて来た山を指さす法正

一同は訳が分からず首を傾げている

「月歌ちゃん、あの山がどうかしたの？」

「あの山で知り合いが私塾を開いてるの。その人に近くで優秀な人
がいないか聞こうと思っただけ」

法正は世界をまわっただけではなく、この国中を旅してもいる
国の各地に知り合いがいるのだ

「というわけで、私と桃香で行ってくるから、三人はお留守番ね。
あそこの街で待ってて・・・三日もあれば戻れると思うから」

その間にお金を稼いでおいてと片目をつむってみせる法正に關羽た
ちは不満そうだった

「みんなで行くのはだめなの？」

「あまり大勢で行くのはよくないよ・・・相手にいらぬ警戒をさせ
るわけにもいかないし」

「なぜ月歌と桃香様の二人だけなんだ？なにかあったらどうするつ
もりだ？」

「鈴々も行きたいのだ！」

「二人とも落ち着いて・・・全員で行くのは無駄だよ？お姉ちゃんと桃香さんが行けばいいんだから・・・私たちは街でこれから備えるべきだよ」

この正論に關羽と張飛は黙る

山に向かうのは知人である法正と、今後のことも考えて劉備が行くべきである

「・・・わかった、二人に任せよう」

「んにゃー、早く帰ってきてね！二人とも」

「うん、わかったよ、二人とも」

「それじゃ、私たちは兵を連れて街に向かいます」

「うん、お願いね」

こうして一行は二手に別れた

山の中

「月歌ちゃん・・・まだ着かないの？もう疲れたよ」

「もう少しだからがんばって。このくらい乗り切れないとこの先の山は超えられないよ？」

「うう、がんばる」

そんな劉備に法正は微笑む

だが、急に横の森に視線を向けた
訝しげに思った劉備は尋ねる

「なにかあったの？」

「いや、これは・・・っ!？」

視線を鋭くさせ、森の中に走って行く法正を呆然と見つめていた

「・・・って！？待ってよ月歌ちゃん！」

慌てて後を追いかける

法正は森の中に少し入ったところで立ち止まり、茂みを睨みつけていた

「急にどうしたの？あれ、その子達は？」

法正の背後には何かに怯えたようにしてうずくまる二人の少女がいたその少女たちを守るように、法正は剣を抜き、かまえている

劉備の問いに対する答えは返さないまま

「ガルルウ・・・」

茂みから一頭の虎が現れた

獲物を品定めするかのような目で法正を見ている

劉備は恐怖のあまり、その場に座り込んでしまう

だが、虎は何もせずに身を翻し、茂みの中に戻っていつてしまった

「・・・もう大丈夫だよ」

法正が剣を鞘に戻しながら背後にいた二人に笑いかける

二人はすぐには反応できなかった

「あ、あのう・・・ありがとうございますゆ・・・あう、ひたかんだ」

「だっ大丈夫、朱里ひゃん？・・・ひたい」

「・・・大丈夫？」

少女たちは涙目だった

戸惑いつつも声をかける法正

「・・・はい、大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

「あ、ありがとうございます・・・」

「たまたま通りかかったただだから・・・怪我とかしてない？」

「怪我とかはしてないんですが・・・その」

「・・・立てません」

二人とも恐怖のあまり腰が抜けてしまったようだ

いや、腰が抜けたのは三人いた

「月歌ちゃん・・・私も立てないよ」

「・・・時間が経てば立てるから、ここで少し休むことにしますか・
・あ、そうそう、私は法正、あつちが劉備、よろしくね」

自身も木に寄りかかって座りながら簡単に自己紹介をする法正

「私は諸葛亮です。で、こちらが・・・」

「鳳統です・・・」

「諸葛亮に鳳統ね・・・それで？二人ともどうしてこんな森の中で
虎に襲われていたの？」

少女たちの名前を聞き、この場所にいる理由を尋ねる

「私たちこの森の奥に生えている薬草を採りに行っただんですが・・・」

「帰りに・・・あの虎と遭遇してしまって・・・怖かったです・・・」

恐怖がよみがえってきたのだろう、二人はまた目を潤ませる

「うんうん、あれは怖かったよね」

「・・・桃香は立ち直り早いよね」

お気楽に言っただけの劉備に溜息をこぼす法正

その様子に少女たちも微笑む

「それで二人とも、目的の物は採れたの？」

「あつ、はい」

「よかったね・・・そういえば二人ってどこから来たの？」

「この山にある私塾からですよ」

「ちようどよかった！私たちそこを目指していたの。一緒に行きましょうか」

「そうだったんですか・・・はい、一緒に行きましょう」

法正たちの行き先が自分たちと同じだということに喜ぶ少女たち
先程の虎がまた来るかもしれないと考えていた二人にとってそれは
朗報だった

「水鏡先生は元気にしてる？」

「はい！ちよつと元氣過ぎかなって思うこともありますけど・・・」

「そうだよね・・・この前なんか・・・」

「へー、面白い人なんだ。でもそれって・・・」

そうして四人はしばらくおしゃべりを楽しんでいた
おしゃべりの最中、少女たちの表情が突然沈みだす

「ただ、ときどき思っんです・・・私たち、こんなことしていいのだろうか」

「・・・力を持たない人々が苦しめられている現状で、「知識」という力を持つ私たちが何もしないでいるのって・・・いいのでしょうか？」

二人の少女の真剣な言葉に、表情に法正たちも真面目な顔をする
劉備が目を瞑って語り出す

「私も同じようなことを考えていたよ・・・力のない人たちから笑顔が奪われていくのを見てるのが辛くて、力のない自分が情けなくて・・・悔しくて・・・泣いた夜もあったんだから。でもね、気付いたんだ・・・考えてるだけじゃ駄目なんだって・・・自分から動きださなきゃいけないんだって・・・だから私は、私たちは力のない人

たちを助けるために戦うことにしたの・・・自分から動いたから、同じ志を持つ仲間もできたんだ・・・」

「考えているだけじゃ駄目・・・」

「自分から動きだす・・・」

劉備の言葉は二人の心を動かした

彼女は自分の心の内を伝えたただけだ

それでも、二人の少女はその言葉に確かに心を動かされた

この人について行きたいと・・・

「・・・やっぱり桃香はすごいな」

少女たちの心の動きを感じた法正の呟きは薄暗い森の中に消えていった

「さて・・・そろそろ行こうと思うんだけど、三人とも大丈夫？」
三人を見回しながら問う

しばらくおしゃべりしていたため、四人はかなり打ち解けていた

「あ、はい。大丈夫です」

「私も大丈夫です」

「えゝ、もうちょつとお話しようよゝ」

劉備が駄々をこねた

幼女たちは苦笑いを浮かべる

「・・・このままじゃ日が暮れちゃうよ？さっきの虎だって戻ってくるかもしれないし」

「さあ皆、早く行こう！ぐずぐずしてちゃだめだよ！」

呆れる法正の言葉に態度を変え、歩き出す劉備

法正は諸葛亮たちと笑みを交わして後を追うのだった

第十二話 時代を嘆く少女たち（後書き）

今さら打ち明けますが・・・

私は原作をやったのが相当前で、しかも蜀 しかやってません

実際うる覚えで、この先オリジナルなのか原作に沿っているのかわからない状態で書いていきます

アニメの方も一期の途中までしか見ていません

そのあたりをご了承ください

第十三話 現実はいつも唐突に 前編 (前書き)

また前後編ものです

「こつしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください
感想も待ってます!!

第十三話 現実はいつも唐突に 前編

街中

「桃香様たちは大丈夫であろうか・・・」

「また言ってるのだ・・・愛紗は心配し過ぎなのだ!」

法正たちと別れ、三人は街に着いていた

公孫?のいた街よりは小さいが、それでもなかなか賑わった街である

三人はとりあえず宿に向かっていた

「お姉ちゃんも一緒だから、大丈夫ですよ」

「だが・・・万が一のことがあったら・・・」

このやりとりもすでに数十回におよび、張飛は十五を超えたあたりで数えるのを止めていた

ちなみに、二人と別れてまだ数時間しかたっていない

「いいかげんにするのだ、愛紗・・・あつ!宿が見えてきたのだ!」

「愛紗さん、今日はもう休みましょう?」

「・・・そうだな」

関羽はまだ何か言いたげだったが、姜維の疲れたような笑顔を見て賛成する

長く歩いたため疲れたと思っていたるようだが、実際は関羽を宥めていたため疲れている姜維だった

水鏡塾

「へへ。では、水鏡先生にこの辺りで優秀な人物について聞きにきたんですね?」

「うん。あの人ならこの辺のことにも詳しいだろうし・・・力を貸してもらおうかなって」

法正たちは水鏡塾を訪れた理由を話しながら歩いていた

「でも、水鏡先生のお知り合いだったんですか・・・」

「・・・会ったことってないですよね」

「二人に会うのは初めてだよ？あの人と会ったのは十年以上前だし・・・あれから一回も顔出してないしね」

「十年も・・・何かしていたんですか？」

「世界をまわってたんだ・・・この国から出てね」

「・・・この国の外ですか？」

「そう、いろんな国を見て来たの・・・五胡は知ってるよね？その向こうにあるローマ帝国、ブリテン、邪馬台国とか・・・いろんな国を見て来たの」

法正は二人にこの国の外の話聞かせた

少女たちは法正の話を、目を輝かせて聞いている

様々な冒険のお話は、本の中の物語みたいで、それでいて現実味を帯びていた

そんな話を聞いて、鳳統がポツリと漏らす

「・・・先生がよく話していた少女って法正さんだったんだ」

「そうみたいだね、雛里ちゃん」

「よく話してたって、何を？」

「先生がよく話してくれるんですよ。とっても優秀な少女の話を」

「十歳にも満たない少女が熊を倒したとか、一晩で兵法書を丸暗記したとか・・・」

法正の問いに諸葛亮が答え、鳳統が話の内容を思い出しながらしゃべる

人見知りの激しい鳳統もすでに打ち解けていた

「・・・そこまで凄いことはやってないんだけどな」

少女たちのはしゃぐ姿に事実を告げることができず、溜息をこぼすその一方で少女たちの妄想のような話は加速していった

「・・・ねえ・・・そんなことより・・・まだ・・・着かないの？」

「・・・あんなにはしゃぐから」

「「あはは・・・」」

劉備は両肩をだらりと垂らしただらしない恰好で歩いている最初のころは先頭で歩いていたのだが、張り切りすぎていた

「もうすぐですよ・・・あつ、見えました！あそこです」

諸葛亮の指さす先には大きな建物があった

木製のそれは修繕された跡がちらほらと見られた

「やっと着いた・・・」

「とりあえず挨拶しなくちゃね・・・あの人はどこかな？」

その場に座り込む劉備を無視し、法正は辺りを見回す

そこに、一人の女性が建物から出て来た

お尻の位置まで届くような長い、明るい茶色の髪をした妙齡の女性だった

「遅かったね、二人とも。無事でよかった・・・あら？お客様かしら？」

「あつ、先生！こちらは・・・」

諸葛亮が法正たちの説明をしようとした時、法正がそれを止め、前にでる

「お久しぶりです、茜さん・・・お元気でしたか？」

法正は水鏡を真名で呼んだ

水鏡は自分を真名で呼んだ法正を訝しげに見つめるが、彼女の微笑みに驚きを見せる

「!!あなたもしかして・・・月歌、なのですか?」

「そうですよ・・・十一年ぶりですね」

「・・・立派に成長しましたね。無事に帰ってこれたんですね?」

「・・・師匠のおかげです」

法正の顔が曇ったのを見て、水鏡は悟った

「そうですか・・・大変だったんですね」

「はい・・・でも・・・私にはやらなければならないことがありますから」

「・・・なるほど、それで尋ねて来たということですか」

「はい・・・いますか?」

「そうですね・・・候補としては二人ほどいますよ」

「よかった・・・今日はもう遅いので、明日会わせてもらっても?」

「ええ、もちろん・・・あなたのお話も聞かせてもらえる?」

「もちろんです」

二人の話に劉備は首を傾げた

いや、劉備だけでなく諸葛亮、鳳統も話の進む速さについていけていなかった

「・・・（ねえ、あの二人はなんの話をしてるのかな?）」

「・・・（詳しくはわかりませんが、今日はもう休みたいです）」

「

「・・・（・・・明日誰かと会うみたいですよ）」

三人は小声で話し合っていた

「そつえば、まだ紹介してませんでしたね。こちらは劉備、志を同じくするものです」

「えっ、あつ、は、はじめまして、劉備です。月歌ちゃんとは幼馴染で、同じ夢を持つ仲間です」

いきなりのことに慌てながら頭を下げる劉備

「はじめまして、劉備さん。私は水鏡、この場所で私塾を開いています」

そんな劉備に微笑みを浮かべながら水鏡も頭を下げる

「今日はもう遅いのでゆつくり休んでください」

「ありがとうございます」

「朱里と雛里も、もう休みなさい」

「はい、先生。お休みなさい」

「お休み」

そう言つて、少女たちは建物の中に入って行つた
それを見届けて、水鏡は口を開く

「・・・あの二人はどう？」

「悪くはないのですが・・・覚悟はあるのでしょうか？」

「あるにはあるのだろうけど・・・あなたたちほどの覚悟は持っていないでしょうね」

「あのう・・・何の話をしてるんですか？」

法正たちの会話の内容がわからないと言う劉備

「ここに来た目的についての話だよ」

「・・・水鏡さん、よくわかりましたね」

「月歌の志は昔と変わってないようでしたからね」

「そうですか・・・」

「ふふ・・・あなたの話もよく聞いていますよ、劉備さん？」

「えっ！私のことですか？どんな？」

法正が自分のことを何と言つて伝えていたのか気になる劉備

自分は公孫？に“泣き虫だった”と言っていたのだ
もちろん、良いところもいろいろ話していた
あの場面で“泣き虫”の部分を持ちだした公孫？を少しひどいと思
う劉備だった

「『普段はどこか抜けたところがあるけれど、芯のしっかりしてい
る、優しさと強さを持っている人』と聞いていますよ」

「えっ！そうだったんですか・・・私、そんなに強くも優しくもな
いですよ」

「そんなことないよ・・・桃香はもつと自信を持ちなよ」

「そうかな？」

「そうだよ」

そう言って微笑み合う二人

水鏡はそんな二人を見つめ、確かな絆を感じた
そして願う

どうか彼女たちの想いが報われ、みんなで笑いあえる日が来ますよ
うに、と

時代を嘆きながらも、何もできない自分に対して、苛立ちや悔しさ
を抱えていた水鏡の目には二人が眩しく映っていた

水鏡に案内された部屋へ着き、劉備は寝台に横になった
山道を登って来たので、疲労はすでに限界だったのだ

「あれ？月歌ちゃんは寝ないの？」

「茜さんと少し話してくるね。桃香は先に寝てて」

「わかった、おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言って、法正は部屋を出ていった

「月歌ちゃん・・・嬉しそうだっただな・・・剣も置いていったよ」

劉備は部屋の隅に立てかけてある剣を手にとった

二本置いてあり、その内の一本を鞘から抜いてみる

白い鞘から現れたそれは輝きを放ち、劉備の顔をその刀身に映した

「きれいだな・・・ちょっと重いけど・・・なんて名前なんだろう？」

しばらく剣を眺めていると、外から大きな音が聞こえてきた

それは人の集団が走るときの地響きによく似ていた

不安を覚えた劉備は剣を鞘に戻し、そのまま手に持って部屋を出た

「はわわ、かかか、火事だよ、雛里ちゃん」

「あわわ、おおお、落ち着いて朱里ひゃん！・・・ひたかんだ」

廊下には慌てている二人の少女がいた

二人の言葉からここには拙いと思い、二人の手を引きながら駆け出す

「りゅ、劉備さん！」

「二人とも、先ずは外に出るよ！ここにいたら危ないから！」

「はっ、はい！」

三人は駆け出す

しかし、出口の近くはすでに火がまわっていた

これでは外にでれそうにない

「・・・どうしよう」

「桃香！」

「あっ！月歌ちゃん！」

「あなたたちも無事だったんですね」

後ろから法正と水鏡が走ってきた

法正の手には剣が二本握られていた

一本は法正の剣だが、もう一本は劉備の“靖王伝家”だった

「・・・剣を持って逃げるのなら自分の剣を持って行きなさいよ・・・」

「あはは・・・そういえばそうだね」

劉備の持つ剣を見て、法正は溜息をつく

それぞれの持ち主の元へ剣を返し、状況を整理する

「・・・目の前に火の壁、か。横にある壁を壊すと家自体が崩れそうだし・・・」

「水鏡先生！他に生徒っていないんですか？」

法正が悩む横で、劉備は水鏡に尋ねる

まだ残っているなら避難させないといけないと考えたのだろう

「先程一通り見てきましたが、皆脱出したようでした」

「よかった」

「そうですね・・・それで、私たちはどうしましょう？」

「・・・あわわ、後ろからも火がきてしまいました！」

このままでは焼け死んでしまう！

この場にいる皆がそう思った時、法正が徐に剣を抜いた
一同の顔に疑問が浮かぶ

「・・・何をするの？」

「まあ、見てて？」

尋ねる劉備に微笑みを返し、法正は剣を構える

一閃、横に薙ぐと、炎の中に道が出来た

「！！・・・一体何が？」

「話は後です！早く外へ！！」

「行きましょう！水鏡先生、諸葛亮ちゃん、鳳統ちゃん！」
そう言って劉備が駆け出す

首を傾げながらも水鏡たちがそれに続いた
外に出た劉備たちは、目の前の光景が信じられなかった

そこには幾人もの少年少女の死体があつたのだ

第十三話 現実はいつも唐突に 前編 (後書き)

またあまり進まなかった・・・

話の進行速度が遅いのはいつものことですが、いい加減反董卓連合くらいまでは進みたいです

今回は感想もいただきました！

やる気がです！ありがとうございます、マフェリア様！
今後よろしく願います！

第十三話 現実はいつも唐突に 後編 (前書き)

今回は難しかった・・・

「こつしたほうがいい」などのアドバイスや「ここおかしい」などの指摘していただけたら直していきますので、誤字・脱字合わせて教えてください

感想も待ってます!!

第十三話 現実はいつも唐突に 後編

「くっ！」

「そん．．．な．．．どう．．．して」

目の前の光景に体がこわばる

水鏡塾の生徒たちであつたであろう者たちの死体が散らばつていたその向こうで下卑た笑いを浮かべる男たちの姿があつた

「くつくつく．．．まだ生き残りがいやがつたか。安心しろよ？俺たちがすぐにこいつらの元へ送つてやるからよ！」

そう言いながら近くにあつた死体を蹴る

もの言わぬ死体となつたその少女の顔が法正たちの方を向く恐怖に目を見開くその顔に、諸葛亮と鳳統は口を抑えて蹲る

「あなた方は一体．．．何故こんなことをしたのですか！！」

水鏡の怒声に、男たちは大声で笑い出す

「ギャハハハ、何故かつて？決まつてんだろ。金目の物を奪つたためだよ！生かして奴隷として売つてやろうかとも考えたが、抵抗してきやがつたんで殺したんだよ！まったく、雑魚はおとなしく強者に従つとけばいいんだよ！てめえらも抵抗しやがったらこうなつちまうからな！」

近くにあつた別の死体を思い切り蹴飛ばしながら、男はそう言つた水鏡は蹴飛ばされた死体に駆け寄り、服に血が着くことも構わず、蹲つて抱きしめた

その姿に再び笑い声をあげる男たち

劉備にはもう耐えられなかった

「うわああーーーー！！！」

涙を流しながら男たちに向かって走る

死体を蹴飛ばした男に向かって剣を振るう

しかし、簡単に防がれ、剣を奪われてしまう

「おお！こいつは見事な剣じゃねえか！気に入った、こいつは俺が貰う」

「返して！！それは私の「うるせえ！」っ！」

無防備な劉備目掛けて剣が振りおろされる

劉備は剣を奪われた拍子に体勢が崩れ、倒れ込んでいて避けれない

「「劉備さん！！」」

三人の悲鳴が重なり、辺りに響く

「・・・覚悟はできてるかしら？」

法正の、感情が全く込められていない声が、静かになった場に響く

「月歌ちゃん！手が・・・」

法正は振りおろされる靖王伝家を素手で受け止めていた

当然、手から血がポタポタと零れ落ちる

それを全く意に介さず、法正は男たちを睨む

「な、なんだデメエ！やるつてのか！ああん！」

「・・・いいみたいね・・・まとめて相手してあげるからかかってきなさい」

法正は男から剣を奪い返し、そのまま地面に突き立てた

そして、左手で自身の剣を抜き、かまえる

動揺をみせる男たちだが、相手は一人と考え、斬りかかった

振りおろされる兇刃、しかし、法正はすでにその場にいなかった

その場にいる全員が法正を見失った

「・・・あの世で悔い改めなさい」

声がしたのは男たちの背後だった
慌てて振りかえろうとする男たち

だが、体が動くことはなかった

その場にいた男たちの首が落ちたのだ

総勢三十人強の男たちは一瞬の間に全滅していた

その見事な斬り口は血がほとんど出ておらず、男たちは最期の瞬間
まで自分たちが斬られていたことに気付いていなかったであろう

わずかに付着していた血糊を、剣を振るうことで飛ばし、鞘に納める
その瞳は自責と後悔に満ちていた

「・・・月歌ちゃん」

「・・・桃香・・・私・・・っ！」

ドサツと音がした

諸葛亮と鳳統が気絶した音だった

人の首が落ちる場面を見て、少女たちには耐えられなかったのだろう

「劉備さん、二人を運ぶのを手伝ってください。近くに食料などを
蓄えておける小屋があります。月歌、あなたは先に行って場所を作
っておいてください」

「は、はい！」

「わかりました」

何かを言おうとしていた法正は、しかし、水鏡の指示に従い、小屋
へ向かった

「月歌ちゃん、傷の手当てしよう？」

「・・・必要ないよ、たいしたことないから」

小屋に少女たちを運ぶと、水鏡は水を汲みに行った

自分が行くと劉備が申し出たが、場所が分からないため、水鏡が一人でいった

劉備に法正を任せて

「たいしたことあるよ・・・そんなに血が出てるのに」

「必要ないよ」

「月歌ちゃ「必要ないって言うてるでしょ!!」っ!」

再会してから初めて聞く法正の怒鳴り声に劉備は身を竦めた

「あつ・・・ごめん・・・ちょっと外で頭冷やしてくる」

そう言っただけ上がり、外へ出ようとした

しかし、劉備が入口に立ち塞がった

「・・・桃香、そこをどいて」

「・・・嫌」

「お願いだからどいて」
「嫌」

「桃香・・・」

「傷の手当てをするまでどかないよ」

「・・・わかった・・・包帯はどこ?」

普段とはまるきり違う劉備の姿に法正が折れた
元の位置に座り直す

劉備は法正の元へ行き、手当てを始めた

「・・・どうしたの、月歌ちゃん?月歌ちゃんらしくないよ?」

「・・・」

「私の知ってる月歌ちゃんは冷静で、私たちが間違った時は優しく諭してく」やめて」・・・月歌ちゃん・・・」

「やめてよ・・・変な幻想を抱かないでよ・・・私は・・・」

「・・・月歌ちゃん」

手当てをする手を止め、法正の顔を見る

法正は顔を見せまいと膝を左手で抱え、顔を伏せた

「私は・・・私だって間違える・・・その度に後悔して・・・今度は間違えないようにって・・・今度は救ってみせるんだって・・・だけど、やっぱり間違えちゃう・・・そんな私が誰かを諭すだなんて・・・そんなことしてきたなんて・・・」

「月歌ちゃんは間違っていないよ？今回も私を助けてくれた・・・ちゃんと守ってくれたもん」

「違う！守れなかった・・・あの子たちを守れなかったんだ・・・」
法正の声に明確な泣き声が混ざる

「・・・月歌ちゃん？」

「茜さんと久し振りに会って・・・師匠の昔の話を聞いて・・・楽しくて・・・気が緩んでた・・・いつもの私なら、賊が来たってすぐに気付くはずなのに・・・建物が燃えて初めて気付くなんて・・・」

「再会して初めてみせる法正の涙に、劉備は微笑みを向ける」

「月歌ちゃん、前に言ったよね？私が変わってないって・・・月歌ちゃんもやっぱり変わってない。ううん、変わってはいるけど、大事なところは変わらないままだよ」

「・・・桃香？」

「迷ってばかりの私の手を、いつも引っ張ってくれて・・・間違えそうになったら手を差し伸べてくれた・・・再会してからのことを思い出してみても、やっぱり月歌ちゃんは私に手を差し伸べてくれて・・・引っ張ってくれた・・・私は自分のことに精一杯で今まで気付かなかったけど・・・全然変わってなかった」

劉備の言葉に法正は顔をあげる

優しい微笑みを浮かべた劉備が目に入った

「泣き虫だったところも変わってないみたいだしね？」

「うう・・・でも、私は・・・」

一度は顔をあげたが、また顔を伏せようとする

しかし、失敗に終わる

法正は劉備に抱きしめられていた

「私の知っている月歌ちゃんは、間違えたり失敗したりする度に泣いて・・・何度泣いても最後は笑顔を見せてくれる」

「私はそんなに強くない・・・ただ、隣に誰かが・・・桃香がいたから・・・何度躓いても・・・何度転んでも前を向けた・・・前に進めたんだから」

「今は違うの？」

「・・・違わないよ・・・だから・・・しばらく一人にさせて？そうしたら・・・また歩き出せるから」

「・・・この前言ってたよね？私はみんなの柱だって」

「えっ・・・うん」

「私が柱なら・・・私は、あなたを支えるよ・・・だから・・・だから、あなた一人で抱え込まないで・・・あなたの背負っているモノを私にも背負わせて？」

「けど、それは・・・」

「誓ったよね・・・私は『法考直と共に進み続ける』って・・・」

劉備は法正の顔を見て、告げる

強い決意のこもった、あの日と同じまなざしで

「あなたがあなたであるかぎり、私はあなたとともにある」

それは遠い昔、二人が出会ったばかりのころのこと

両親を亡くし、孤独に泣いていた自分の前に現れた少女

泣いてばかりの自分に笑いかけてくれた、手を差し伸べてくれた少女

その時と同じ目だった
今ならわかる

あの時は優しさしか感じなかったその瞳に込められたものが

「・・・やっぱり桃香にはかなわないな」

「え？何？」

「いや・・・何でもないよ・・・」

呟いた言葉は劉備には聞こえなかった
だが、感じられた

法正の心が再び前を向いたのを

「ありがとう、桃香・・・手当ての続きをお願いしてもいい？」
「うん！」

笑顔で告げる法正に笑顔で返す劉備

そんな二人のやりとりに、小屋の外で話を聞いていた水鏡もまた、
微笑むのであった

- 翌朝 -

昨夜、法正たちは手当てを終えた後、ゆっくりと休んだ
水鏡は法正の手当ての途中で戻ってきた
その後、特に会話もなく、疲れも手伝い、就寝に至った

「・・・あれ？・・・ここはどこ？」

「・・・どうしたの、朱里ちゃん？」

「あ、雛里ちゃん・・・ここはどこなのかなって」

「え？どこって、お部屋じゃあ・・・ないね」

諸葛亮と鳳統が目を覚ました

法正たちはまだ眠っている

二人は辺りを見回す

その場所に見覚えはあった

「ここって・・・食料とかをしまってた小屋だよね・・・どうしてここに？」

「・・・昨夜何かあったわけ？」

思い出そうとするが、なんだかもややもやして思い出せない
軽く混乱するが、その時、近くから声がかかった

「・・・ふあゝ・・・朝？」

「「あつ！法正さん！」」

「ん？あつ！二人とも目を覚ましたんだね・・・よかった」

「・・・何かあったんですか？」

安堵のため息をこぼす法正に、諸葛亮が尋ねた

「・・・外に出れば思い出せるんじゃないかな？」

「外・・・ですか？」

齒切れの悪い法正を訝しみながらも、少女たちは小屋を出る
背を向ける形であったため、法正の悲しげな表情を見ることはなかつた

「えっ？・・・そんな・・・うそ・・・だよね・・・」

「・・・どうして？・・・だって、昨日もいつも通りで・・・」

その光景を見て、昨夜の出来事を思い出し、呆然とし、立っ
ていられなくなる

そんな二人の頭に優しく手がおかれる

「これが現実よ・・・昨日笑っていた人が次の日には物言わぬ死体
になる・・・今のこの国に溢れかえっている現実・・・」

「「・・・」」

「この悲しみを終わらせるために、私は・・・私たちは戦うって決

めたの・・・たえ何かを失っても、その先に人々の笑顔があるって信じて・・・覚悟を決めた・・・あなたたちはどう？」

「・・・正直、わかりません・・・いきなりすぎて・・・」

「朱里ちゃん・・・。・・・私も、わかりません」

「・・・そう」

少女たちの答えは予想できた

今までこんな閉鎖された空間ですごし、外の話を聞くだけの生活を送ってきたのだ

現実だと受け入れるのには時間がかかるだろう

「それでも・・・」

「ん？」

「それでも、これだけははっきり言えます。哀しいって・・・こんなことが当たり前だなんておかしいって・・・こんなの間違ってるって」

「・・・うん、そうだよね・・・憎しみも何もなく、人が人を殺すなんて間違ってる」

「・・・あなたたちがどう思っても、この現実是不変ならないよ」

「・・・想うだけではだめだというなら・・・私は行動します・・・この国を変えるために・・・一つでも多くの悲しみがなくなるように」

「・・・私たちが今まで学んできたことを・・・誰かのために使いたい」

二人の真摯な眼差しに、嘘はないことを悟る

法正は微笑みを浮かべ、二人に言う

「だったら・・・私たちと一緒に行かない？同じ想いを抱く仲間として」

「・・・いいんですか？」

「私たち・・・戦うことはできませんよ？」

「そのかわり、あなたたちには知識がある。茜さんの、水鏡先生の教えを受けてきたあなたたちの知識。・・・この国はもうすぐ滅びるでしょう」

「えっ！」

「な、何を言ってるんですか！」

この国を変えるって話をしていたはずが、いきなり滅びるという発言に驚きを隠せない少女たち

その様子を無視して、法正は続ける

「この国はすでに末期よ・・・今から立て直すことは不可能でしょう・・・国という囲いを失ったこの大地は荒れ、人々は覇権を争うことになる」

「そんな・・・」

「だからこそ・・・私たちは新しく国を興す。人々を守るために・・・そこには力も必要だけど、知識も必要になってくる・・・だから、私たちに力を貸して？」

少女たちの前に立ち、手を差し出す

朝日を背にしたその姿に、少女たちはこの人を信じようと思った

「はい・・・私たちの知識、存分にお使いください」

「・・・お使いください」

「ええと・・・」

臣下の礼を取る少女たちに戸惑う法正

「・・・何をしてるのかな？」

「し、臣下の礼、ですが・・・何か違いましたかっ!？」

「あわわ・・・こ、ごめんなさい」

「そうじゃなくて・・・なんで臣下の礼を？」

「こ、これからは家臣として・・・」

「ほ、法正様に仕えるから・・・でしゅ・・・」

慌てる二人の様子に、法正はついつい吹き出してしまふ

「ふふふ．．．そういうのはいらないよ。それに、仕えるなら桃香に、だよ？」

「．．．」

「．．．」

「おはよー．．．あれ？どしたの？」

法正の言葉に絶句する諸葛亮と鳳統

そこへ、丁度良く劉備が起きてきた

劉備は自分の顔を見つめる三つの視線に首をかしげる

「ええっーーーー！！！！！！」

「きゃっ！．．．なに？何かあったの？」

「．．．この二人も一緒に来てくれるって」

「そうなの！？」

「．．．あつ、ええと．．．はい」

「．．．そういうことになりました」

「そっか．．．あつ、それじゃあ私の真名を預けるね．．．私は桃香、これからよろしくね」

「それじゃあ私もだね。私は月歌、頼りにさせてもらうね」

二人が真名を許したことで、まだどこかボーっとしていた少女たちも我に返った

「わ、私は朱里でしゅ！．．．はわわ．．．噛んじゃった．．．」

「ひ、雛里でしゅ！．．．あわわ．．．痛いです．．．」

慌てた二人は大事なところで噛んでしまった

その様子を微笑ましく思いながら見つめる法正たち

「．．．そういうことになりましたが、いいでしょうか？」

法正が振り返りながらそう言った

劉備たちは疑問符を浮かべながら法正の視線の先を見る
そこには水鏡が立っていた

「・・・よく気がつきましたね」

「昨夜は気付けなかったので・・・ね」

昨夜、法正は疑問に思っていた

水鏡が水を汲みに行くのに時間がかかり過ぎではないのかと

「ふふふ・・・さて、二人とも」

「はい！」

「話は聞いていました・・・あなたたちが向かう先には、今までのように教え導いてくれる存在はいません・・・むしろ、自分たちが導く立場になるのです」

「・・・」

「あなたが道を間違えたりすれば、今よりも多くの血が流れるでしょう・・・その自覚はありますか？」

「・・・あります」

「そうですね・・・なら、私からは一言だけです・・・迷った時には今の気持ちを思い出さない・・・『初心、忘れるべからず』です」

「・・・はい」

「・・・忘れません」

「それでも迷ってしまった時や、疲れてしまった時はいつでも帰ってきてなさい・・・ここはあなたたちの“家”ですから・・・そして、それらを解消したら、もう一度歩き出せばいいのです」

「・・・はい」

「・・・劉備さん、月歌、この二人のこと・・・よろしく願います」

少女たちの返事に微笑みを返し、法正たちの方を向き、頭を下げる

「もちろんです」

「・・・任せてください」

法正たちは真剣な表情で頷く

「ありがとうございます・・・では、二人とも、行ってらっしゃい」

「・・・行ってきます！」

いろいろと言いたいこともあるだろうが、水鏡たちの交わした言葉は家族を送り出すための言葉だった

少女たちは涙を流しながらも、返事をし、頭を下げる

「お世話になりました」

「・・・では、またいずれお会いしましょう」

そうして、法正たちは山を下りていく

その後ろ姿を、水鏡は見えなくなるまで見つめ続けた

「そういえばさ・・・水鏡さんってこの後どうするつもりなのかな？」

「また、建物を建てて生徒を集めるってさ」

登って来た時と同じ道を下りながら会話をする

「先生・・・大丈夫でしょうか？」

「心配です・・・」

水鏡のいるであろう方角を見つめながら、暗い表情をする諸葛亮と鳳統

劉備も同様の表情をしている

そんな三人に法正は笑いかけながら言った

「みんなあの人を甘く見過ぎだよ？」

「「「えっ?」」」

「茜さんは私の師と同じくらい強いんだから」

「「「・・・えええーーーー!!!!!!」」」

驚く三人を無視して、法正は歩を進める

「ほら三人とも、行くよ?」

振りかえった法正は手を後ろで組み、笑顔で三人を急かす

「待つてよ」

「はわわ・・・先生ってそんなに強かったんだ・・・」

「あわわ・・・朱里ちゃん、月歌さんたち先に行っちゃよう」

それぞれの反応を返しながら、一行は近くの街を目指した

柔らかな朝日が一行の行く先を照らしていた

第十三話 現実はいつも唐突に 後編（後書き）

もし私が読者だったら、今回の話を読んで思ったでしょう

「あれ、これって法正が告白して振られた直後の健気な女の子みた
いな」と

今回はそこら辺の表現が難しくて困りました

そんでもって満足できていません

時間があつて、上手い表現を思いついたら修正するかもしれません
その時は報告しますのでよろしく願います

さて、またまた感想を頂きました

るかけん様、ありがとうございます

次はようやくあの人の登場になると思います

第十四話 その怒りは誰のために（前書き）

本当にすみません！！

最近忙しく、なかなか書く時間がとれなかったもので・・・

今後はこんなことのないようにしたいのですが、確約はできません
ただ、一人でも読んでくれる方がいる限り、投げ出すつもりはありません
ですので、今後どうかよろしくお願いします

第十四話 その怒りは誰のために

「ええい、離せ！桃香様の身に何かあったのかもしれないのだぞ！」

「落ち着いてください！今から向かつて、入れ違いになるかもしれないません！」

「おお、桜がんばれ！」

「鈴々も手伝つてよ！」

法正たちと離れ、一夜明けたその日、関羽は山に賊が出たという話を街に来た商人から聞いた

なんでも森の中の建物に火を放つたらしい

夜中に森の頂上付近が炎で明るく見えたそうだ

そんな話を聞き、関羽は劉備の危機と結びつけたための現状だった山へ向かうと言って聞かない関羽を姜維が体を張って留めている

「諦めるのだ、桜。愛紗はそうならもう止められないのだ」

「そんなこと言っただって……」

張飛の無情な言葉に軽く絶望を感じる姜維

「お姉ちゃん、早く戻ってきてよ！」

「呼んだ？」

「えっ！？……きゃ！」

姜維の声に言葉が帰って来た

まさか返事があるとは思っていなかった姜維は力を抜いてしまい、関羽の勢いに押されて道端に転がる

「あいたたた……」

「大丈夫、桜？」

「ありがとう、お姉ちゃん……って、お姉ちゃん！？」

「……いきなり大きな声出さないでよ」

「あ、ごめん・・・ってそうじゃなくて!!」

「少し落ち着きなさい? はい、深呼吸」

「スー・・・ハー・・・スー・・・ハー」

法正は一先ず、取り乱す姜維を落ち着かせた

そして、回りに仲間が揃っていることを確認する

「ただいま、みんな・・・って、愛紗さん? その顔怖い・・・って
いうか近い・・・」

「桃香様はどこだ! まさか・・・賊に襲われたのか! ?」

法正の近くに劉備がいない

その事実に関羽は法正の服に掴みかかった

「まあまあ・・・あなたも落ち着いて、ね?」

「落ち着いてなどいれるか!! 桃香様の身に何かあったのなら「私
がどうかした?」っ! 桃香様! ご無事でしたか!」

「えっ、あっうん・・・私は大丈夫だけど・・・」

劉備の視線は関羽の横に注がれていた

「・・・この扱いはひどいと思うんだけど」

「ん? 月歌? なにしてるんだ?」

「・・・なんでもない」

法正はなぜか地面に寝転がっていた

首を傾げる関羽にそっけなく言い、立ち上がり、砂埃をはらう

「大丈夫? お姉ちゃん」

「・・・危うく右手で受け身を取るところだったよ」

「んにゃ? 右手、どうしたのだ?」

包帯の巻かれた手を見て、張飛が尋ねる

「ちよつとね・・・」

「「？」」

曖昧な言葉で誤魔化す法正は苦笑いを浮かべている
尋ねた張飛は姜維と顔を見合わせて首を傾げた

「それにしても・・・どこに行つてたの、桃香？探したんだよ」

「えへへ・・・ごめんね・・・お腹すいちゃって・・・」

「勝手に動き回らないの・・・おかげであの二人と手分けして探す
羽目になっちゃったじゃない」

「？お姉ちゃん、『あの二人』ってだ「月歌さん！桃香様はいま
したか？」・・・誰？」

姜維の言葉の途中で二人の少女が走つて来た

法正の真名を口にしたその少女に鋭い視線を送りながら姜維が尋ねる

「そんな怖い顔しないで？この二人は私たちの新しい仲間なんだか
ら」

「・・・そうなのか？」

法正の言葉に反応を示したのは関羽だった
少女たちを値踏みするかのようにみつめる

「二人とも、彼女たちがさっき話してた私たちの仲間・・・順番に
姜維、関羽、張飛だよ」

「あ、あの、初めまして、しよ、しよかつりようれしゅー！」

「ほ、ほうとうでしゅー！」

「・・・諸葛亮（？）に鳳統（？）か・・・では、この二人が？」

「そう、私たちの軍の軍師になってくれるの！」

関羽の問いにはどこか怒気が感じられた

自己紹介で噛む二人の少女に不審さを隠そうともししていない

関羽の放つそんな雰囲気少女たちは身を震わせている

「もう！駄目だよ、愛紗ちゃん？そんな風に二人を睨んだら！怖が

「っちゃうから」

「ですが・・・この二人で大丈夫なのですか？見るからに頼りなさそうなのですが・・・」

「そんなことないよ！・・・きつと」

「・・・桃香お姉ちゃんも自信ないのか？」

「・・・大丈夫なの、お姉ちゃん？」

姜維の言葉に、一同の視線が法正に集まる

「ん、何？」

「・・・聞いてなかったの？」

「いや、あの屋台からおいしそうな匂いが・・・」

「はぁ・・・この二人は軍師として優秀なの？」

「それはもちろんよ・・・多分だけどね」

「多分って・・・また勘？」

法正の自信満々な声とは裏腹な言葉に姜維は疲れた顔を見せる
法正の勘はまず外れないのだが、簡単に信じるのは少し難しい問題である

二人を軍師として認めるということは自分たちの命を預けるようなものだ

特に今後は自分たちの数倍もの軍勢にも挑むことになるだろう
生き残るには相当に優秀な策略が必要になってくる

その策を考える軍師を個人の勘という曖昧なもので信じられるわけがない

「うつん、違うよ？」

「違うの？それじゃあどうして？」

「私もこの子たちの力を知っているわけじゃない。でも、茜さんの力は知ってる・・・あの人が優秀と評価したのだから、この子たちは優秀だって信じられる」

「・・・」

法正の言葉に嘘は感じられなかった

その強い瞳と言葉に姜維は黙ることしかできない

諸葛亮たちを優秀と評価した人物について知っているのは法正を除くと諸葛亮と鳳統だけであるため、姉の言葉でもすぐに信じる事ができなかった

そして、この場にはもう一人少女たちを信じられない人物がいた

「・・・月歌がその人物を信じていることはわかった。だが、私はその人物についてなにも知らない。だからこそ言わせてもらうが、その人の目が曇っているということだっでありえる・・・お前がその人に会ったのは十年も前のことなのだろう？人が衰えるには十分な期間だと思うのだが？」

「愛紗ちゃん！」

「・・・それじゃあ、愛紗はどうしたら納得してくれるの？あなたがそういう考えなら、この場でいくら言葉を尽くしても無駄なのでしょう？」

「月歌ちゃんも！二人とも、少し落ち着こうよ！」

真剣な顔で言い放つ関羽に対し、若干の怒りを込めて法正は言葉を返す

まるで睨みあっているかのような雰囲気さえ醸し出す二人の間で劉備は懸命に止めようとしていた

「・・・そこまで言うなら証明してもらおうか・・・その二人が優秀な軍師であるということを」

「ちょっとあいし「わかりました」！朱里ちゃん!？」

「証明してみせましょう・・・だから！」

「先程の言葉・・・撤回してください・・・」

今までおろおろと会話を聞いているだけだった諸葛亮たちから発せられている雰囲気、関羽は一瞬吞まれた

それは間違いなく怒気であった

その身に纏う空気の変わりように、退屈そうに話を聞いていた張飛まで驚きを隠せない

ただ一人、法正のみが微笑んで二人の少女を見ていた

「・・・先程の言葉？」

「・・・です」

「なんだ？」

「先生の『目が曇っている』って言葉と！」

「先生が『衰える』って言葉です！」

「っ！！」

自己紹介ですら囁んでいた少女たちの姿はそこにはなかった
怒りをむき出しにする少女たちに、関羽はひるんだ
そして、二人の少女の言葉は姜維の心を動かした

「・・・何を驚いているのですか？師を馬鹿にされて怒るのは当然のことでしょう？」

「桜？」

「先程はわかりませんでした、二人がどうして怒ったのかを・・・
考えてみれば当然でしたね」

「・・・」

「姜維さん・・・」

「もし、私の目の前でお姉ちゃんを馬鹿にするような人がいたら・・・
私なら剣を抜くぐらいはしますよ」

「・・・」

姜維の言葉に関羽は何も言い返せなかった

「・・・ちよつと恥ずかしいんだけど？」

「・・・はあ」

真面目な空気を壊す法正の発言に溜息をこぼす姜維であった

「・・・ならば、桜はこの二人を信じられるのか？」

「それはこれから証明してくれるんでしょ、諸葛亮さん、鳳統さん？」

「あ、はいっ！」

「もちろんです」

「ちょうどよかったかな。この近くに黄巾党の拠点があるという話を聞いたから」

「・・・規模は？」

「現在黄巾軍およそ一万五千が滞在しているらしいですよ」

「なら、そこを攻めましようか・・・もう少し情報を集めてからね」

「わかった・・・それと、先程の言葉、撤回しておこう・・・すまなかつたな」

「い、いいえ・・・あの、その・・・」

「こつちこそ、その、生意気なことを言ってしまい・・・」

「いや、かまわない」

「ふふ、じゃあ、早速情報を集めようか！」

「・・・その前にご飯にしない？」

劉備の発言に關羽、姜維、諸葛亮、鳳統が肩を落とした

「賛成なのだー！」

「私も賛成・・・お腹減ったー！」

「・・・お姉ちゃんまで」

姜維の言葉に、みなが笑顔になった

第十四話 その怒りは誰のために（後書き）

散々時間をかけておいて、予定してたところまで進まなかった・・・

orz

物語の進行速度の遅さが非常に申し訳ないです・・・

マフェリア様、感想ありがとうございます！

煮詰った時にはいつも皆さまに頂いた感想を励みにさせていただいています

今後もしろしく願います！

次こそあの人が登場してくれるでしょう！（多分）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360n/>

真・恋姫無双 ～星空の誓い～

2010年10月15日05時24分発行